

# Blowers

vol. 11

# 乗 船 口

3	LOOK OUT!	EX-SYSTEM
10	突発企画 船内劇場	本居こじ
11	学園PBM真鶴学園風雲録 全体リプレイ	
	真鶴レポート	岬当麻
22	空技廠創立3周年企画	
	スタッフ紹介《その3》	空技廠横浜評議会
23	Damyan=Kizaki's Road of The Messiah.	Damyan=Kizaki
30	《三等雑居室》	
35	《三等食堂》	
37	迷想装甲擲弾症候群	紺野紫楼
40	8号アンケート集計結果	田中真人

※「真鶴学園風雲録」に参加するためには、別売りのルールブック（送料込み200円）が必要です。今回は11/15までにアクションを送って下さい。

※「PEACE PLESSER MAYA」はイラストレーター音信途絶のため、休載しています。（メカSFもの：イラストレーター急募中）

※「Mental Ranger」は作者不調のため、休載しました。

※「プロメテアのページ」は担当者多忙のため、休載しています。

※財政再建のため、10月いっぱいは一切の業務を停止いたします。

☆ネットゲーム（ホビー・データ）参加者の皆様へ

あなたのキャラのリアクションのコピーを一緒に送って下さった場合、本のお代を300円ポッキリ（早い話、切手不要ということ）としています。

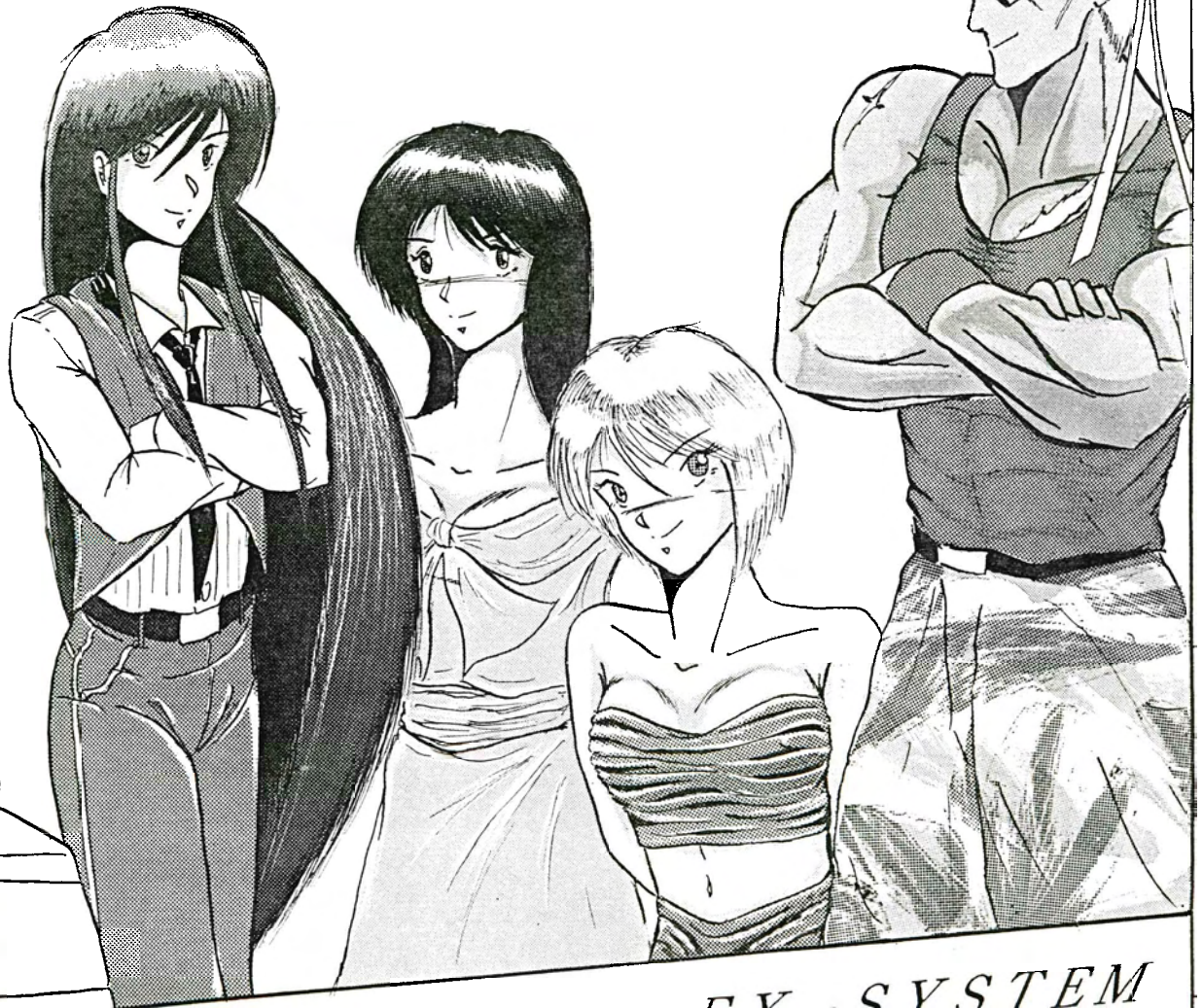
## 船 長 室 by 本居こじ

夏コミは大変でした。開場時刻の10時過ぎに並び始めたのですが、そのあと会場に入れたのが実に1時チョイ前。炎天下、ほとんど風の中でウロウロソロソと列を成していました。“ヤマッキー”松生氏と“皇室ファン”古川との3人で行っていたのですが、（ほかにもう一人いたが彼は早期に脱落）もうその間の雑談がY談ばかり。そうでないときは（ピー）な天皇ネタ。周囲は少女創作かFRPG系の女の子ばかりで、「理性」が普段の半分でも働いてれば絶対にやらないような失態を演じていました。今思っても汗顔ものです。もっともあの当時も、シャワー浴びたまんまみたいなぐらいに汗だくになってましたがね。今回は、レポートはナシです。レポートにできるほどの動きはしていませんし……なんせ暑さで頭に血が上っていたので、今記録にしろと言われても、とてもできた相談ではありません。「行った、漂った、買った」としか書きようが……

さて、今回のネーミング・マイナーチェンジで皆さん嫌でもお気づきでしょう。この本は定期客船に見立てられています。定期連載が一等船室、真鶴風雲録が二等船室、そして一般参加の三等船室。本当の定期客船はもっと等級分けが厳格で、より上の等級のデッキへ下等船客が入ることは許されませんが、まあその辺はアバウトということとで。

# WORLD

ACT2: アーバイン・スキャンダル



Presented by EX-SYSTEM

2-1:アーバイン・スキャンダル

1; (REPOTER:ユウ)

「あのねえ……………」

正直言って、俺は半分頭にきていた。

俺が特殊技術部からの呼び出しを受けたのは、昨日の午後だった。ボディの機能チェック、特に換装したばかりの左腕の性能チェックと言うことだったんで、行かないわけにはいかなかった。なんせ、俺の身体ボディのメンテはここでやってもらうほかないんだから。

そういう訳で、素直に人が呼び出しに応じたってのに…………

約半日後、とりつけられたボディを見て俺は言葉を失った。

最初に視覚インターフェースが繋がったときから何か変だとは思ってたんだ。俺の方を見てるスタッフの様子が何かおかしいような気がしてた。

各部のインターフェースが繋がるにつれて、感覚がおかしいことに気が付いた。最初はインターフェースの調子が悪いのかと思った。けど、どうもそうじゃないような感じ。

「OK。全部終わったぞ」

俺の体をベッドに固定していた金具が次々と外れていく。

「起きて新しいボディを見てみな♪」

な、なんだ？今の「♪」は？

ゆっくりと起き上がる。身体の重量バランスが、いつもと違う。起き上がりながら自分の体を見やる…………

「☆\*※④❗!?!」

…………感覚のおかしさ、重量バランスのおかしさはこのせいだった。

…………賢明な読者諸氏はお気付きだろう。俺の身体になにがあったのか。

言うならば、「お約束」である。

俺のボディは女性型に変わっていた。

「あるべきところにあるはずのものがなく、ないはずのところに重量感がある」事の気持ち悪さが理解して貰えるだろうか…………

「一体どういうつもりなんだよ?!」

声まで変わってる手の込んだ事やってくれるよ…………

「まあ落ち着いて聞け」

こんな時に、誰が落ち着けるってんだよ！さっさと元に戻せっての！

「これは俺たちが趣味とか遊びでやったわけじゃなくて、今回の任務の為の事なんだ。主任から聞いてないのかい？」

なにい?!あ、あんの狸オヤジめ、またそうやって人をハメやがって！

素直に引っ掛かる俺も俺だけけど……

「で？何なんです、人の体をこんなにしなきゃならないような今回の任務ってのは？それから、何で今まで何も話してもらえなかったのか、納得のいく答えを聞かせてもらいたいですね」

声が女声だから全然迫力が出ない。それでも、俺の怒りは主任に伝わったらしい。ようやく今回の任務について話し始めた。

「まず、今回の任務だが……ウィルソン・フォーランドは知ってるな？」

言われなくても知ってる。ベガ系の惑星国家メダリアに本拠地を置く、銀河連合内でも屈指の麻薬カルテルの幹部だ。3週間前、組織についての情報を手土産に連合麻薬捜査局に自首してきた。法廷での証言と引き替えに、身柄の保護を求めてきたのだ。恐らく組織内での権力争いに破れたのだろう。それで身の危険を感じ、自首してきたものと考えられた。

「で、そのフォーランドがどうしたんです？」

「我々にボディガードを依頼してきた」

はぁ？

一瞬の空白。

「それって……すごく珍しくない？」

俺たちのところは、基本的には依頼相手は選ばない。人物よりも、依頼内容とその真偽が問題なのである。つまり、たとえ一国の首相からの依頼であっても、その内容に不審な点や社会に反する点があったならば、その依頼は受けないのであり、またその逆もありうるのである。今回はそのケースと言っていいだろう。

が、今回は少し話が違う。今回の依頼主であるフォーランドは、俺たちを心底憎んでいたはずだ。なにしろ、フォーランドが組織内での勢力争いに負けた原因の一つが、ある大きな麻薬取り引きの失敗であり、その取り引きの失敗の原因が捜査当局の依頼を受けた俺たちによる裏工作だったのだから。その時、奴は復讐の言葉を残してその場から逃げた。別に見逃した訳じゃない。ただ、奴の運がよかっただけだ。捜査当局が逮捕に気を取られ過ぎたもんだから、取り逃がししまったわけ。

だから、奴がガードを依頼してくるなんて、何かの罠としか思えない。が、D. S. S. の依頼内容に対する調査は完璧なはずだ。罠だとすれば、何か不審な点があるはずだ。

「この任務について話していなかったのは、その調査に時間がかかったからだ。ついでに言うと、今回の任務は3人でやってもらう」

へ？定員より1人少ないじゃない。

大丈夫なのかい？

「3人？だれが抜けるの？」

「おまえさんだよ」

……はぁ？

なにそれ？

「今回、おまえさんには単独で別の任務に就いてもらう。そのためのボディ改造だったんだ」

そういうわけね……

今回の俺の単独任務は、「アーバイン・スキャンダル」に関すると思われる潜入捜査だった。

ここで、「アーバイン・スキャンダル」について説明しておこう。

この麻薬カルテルに対して、かつて捜査当局が秘密裏に、麻薬カルテル壊滅作戦「アーバイン作戦」を展開したことがあった。この作戦は、銀河連合初の、宇宙海兵隊特殊部隊との合同作戦だった。事前の潜入捜査により得たデータを基に海兵隊作戦士官が綿密な作戦を立て、その作戦を実行可能な部隊の選定が行われた。

選ばれた部隊は、アルデバラン方面軍団所属第869独立特殊戦闘中隊。

荒くれ者揃いで知られる連合宇宙海兵隊の中でも、アルデバラン方面軍団はその勇猛果敢さで知られている。その中でも、第869独立特殊戦闘中隊は最強のゲリラ戦、白兵戦能力を持つ部隊といわれていた。

この作戦において重要なのは隠密能力と高い白兵戦力であり、これを完全に備えたのがこの部隊だったのである。

実際には、この部隊の隊員には素性のよく分からない、経歴不明者が非常に多く、優秀ではあるが危険な存在といわれていた。

が、作戦本部としても捜査当局としても、この作戦は是が非でも成功させなくてはならない。その為、少々の危険性に

は目をつぶり、本部は第869独立特殊戦闘中隊に指令を下した。

作戦は予定通り決行された。すべて予定通り、のはずだった。

だが、作戦は失敗、それも海兵隊史上最悪の事態となって幕を閉じた。

作戦内容のすべてがカルテル側に漏れていたのである。第869独立特殊戦闘中隊は作戦上の重要な各ポイントにおいて待ち伏せをうけ、部隊は全滅したのである。

と、まあこういった形で「アーバイン作戦」は幕を閉じた。が、その後にある噂が海兵隊内で流れ出した。

その噂とは、「作戦の失敗は第869独立特殊戦闘中隊の隊員の誰かが情報をカルテル側に売ったから」と言うものだった。実際に、全滅したと言われていた第869独立特殊戦闘中隊にも僅かながら生き残りがいたらしく、噂はさらに信憑性を持ち始めた。

信憑性を増した噂は海兵隊内部だけに止まらず一般にまで流れ、「アーバイン・スキャンダル」と呼ばれるようになったのである。

銀河連合軍や捜査当局は、いまなおこの事件の真相を追っているが、いまだに真相が掴めていない。

ところが、ウィルソン・フォーランドからの依頼について調査していたD. S. S. は、偶然にも「アーバイン・スキ

「スキャンダル」に関係すると思われるある人物の存在を確認した。

その人物とは、ゲイル・ローランド。メダリア国会の上院議員を務める人物だった。

カルテルと議員の癒着はかつてから噂になっていたんだが、それを裏付ける証拠も何もなく、メダリア議会はそれを根も葉もない噂として片付けていた。だが、大した産業もなく観光地でもないはずのこの星の議員たちの羽振りを見ていると、その噂もまんざら嘘ではなさそうに思える。

それだけではなく、ゲイル議員は調度「アーバインオペレーション・アーバイン作戦」が終わった頃からメダリアに定住しており、一部では第869独立特殊戦闘中隊の生き残りだと噂されていた。

捜査当局との相談の結果、ゲイル議員と「アーバイン・スキャンダル」、そして議会とカルテルの繋がりを探る為に、潜入捜査が決定したわけだ。

……にしても、別に女装までしなくたって……

2 ; (REPOTER: ジュン)

今回の任務、ウィルソン・フォーランド護衛はユウぬきでやるって話を聞かされたのは、つい三日ほど前だった。

リーダー抜きだっるのが少々気になるけど、まあ、あたしらだけでも何とかな

るでしょ。

ほんとのこと言えば、あんまり気が乗らなかったんだけどね。だって、あのフォーランドって男、元々あたしらと敵対してた上に、一度はあたしらの命を狙ってるんだから。

信用しろって言われても、ねえ。

ま、仕事は仕事。上の方が実行を決定したって事は、とりあえずは信用していいって事だから、それについては一安心。

だけど、もう一つ気掛かりなことがあるんだよね……

「ジュン、ショウは？」

「またどっかいっちゃった」

これだ。今回の任務を聞いてから、ショウの様子がおかしいんだ。なんかふらりと姿くらましちゃうし、時々上の空だし……

あんな筋肉馬鹿でも、悩むことってあるのかな。

そういえば、いつだったかも、こんなことがあったっけ。あん時の任務も、結局のところ最後の最後で目標ターゲットを取り逃がしちゃったんだよね。別に、あたしらのせいじゃなかったけど。

主力がこれじゃ、ちょっと不安になっちゃうなあ。

「ショウ、ここにいたの。でかいくせになかなか探すのに苦労したわよ。一体、どうしたってのよ？」

あたしがショウを見付けたのは、捜し出してから約半時間後。シューティング・レンジになんかに居るとは思わなかった。結構珍しいことだよ、ショウが室内のシューティング・レンジに籠ってるなんて。いつでも外のレンジにいるのに。

どうやら、つい今し方まで射撃をやっていたらしく、レンジ内には硝煙の匂いが立ち込めていた。

「鬱憤ばらし？ま、しょうがないわよね。なんてたって、あのフォーランドを護衛しなきゃなんないんだもん。今からでも鬱憤たまるわよね。なに撃ってたの？」

ショウの手には、見慣れない拳銃が握られていた。いつものデザート・イーグルじゃない。もっと古臭いデザインのリボルバーだった。

「どしたの、それ」

「ん？まあ、な……………」

ショウは答えなかった。ただ、悲しげに笑っただけだった。そしてまた、弾を込め直したりリボルバーを無言で撃ち始めた。

だから、あたしもそれ以上は何も聞かなかった。

ほんとは知りたかったけど、なんだか聞いちゃいけない事のような、ショウ自身が人に知られるのを拒んでいるような、そんな気がしたから。

そう思ったとき、少し、悲しい気持ちになった……………」

「あ、あのさあ」

先に口を開いたのは、あたしだった。あまりのこの沈黙の重さに耐えられなかったから。

「その銃がなんだか知らないけどさ、鬱憤晴らすんだったらマシンガンの方がいいよ。思いっきりぶっばなすと気持ちいいからさ」

あたし、何言ってるんだろ。そういう問題じゃないのに。

自分でも、頭ん中が混乱してるのが分かる。

言葉を選ばなきゃいけないと思ってるのに、でも、なんて言ったらいいのかわかんないし……………」

訳わかんなくなってきたあたしの頭に、ボンとショウの手が乗った。

「ありがとよ」

見上げると、いつものショウがそこに居た。いつもの優しい、それでいて自信に満ちた強い目が、あたしを見下ろしていた。

「ちょっと嫌なもん思い出しただけや。すまん、心配掛けて。もう大丈夫や」

そう言って、ショウは笑った。

数日後、あたしたちは出発前の最後のブリーフィングをやっていた。

「と言うわけだから、地元警察も警備はやっている。それほどきつくはないだろう。ただし、油断はするな」

そんな事ぐらい、言われなかったって



分かってる。子供じゃないんだから。

でも、地元の警察まで使ってるのに、さらにあたしらまで呼ぶなんて、フォーランドの情報ってのはそんなに重要なのかな。やっぱり、どうも腑に落ちないなあ。

「何か質問は？」

「ユウはどないしてる？」

そう言えば、今回別行動をとるって聞いてから、全然姿見てないな。どうしてるんだろ。

「ユウなら、一足先にメダリアに飛んだよ。彼の任務は特別なんでね」

確か、国会議員とカルテルとの繋がりを探る為の潜入捜査だったか。そっちの方が大変そうだな。

「確か、相手は議員ゆや言うてましたね。写真かなんか、見せて貰えます？」

なるべく鉢合わせないようにするために顔を覚えておきたい、とか何とか言って、ショウは主任にその議員の写真を見せてくれて頼んだ。そんなの見たって、大して意味ないと思うけどなあ……………

「これだよ。ま、何にしても、ユウのことは絶対にばれないようにな。相手が国会議員なだけに、下手にばれるとあとが大変だし、場合によっちゃユウの命も危ないからな」

ショウの奴、全然聞いてない。目を見りゃわかるよ。食い入るように写真を見る。

こいつ、そっちの趣味なんかなかった

はずだよ。

「ねえ」

あたしは、ショウを肘でつつ突きながら小声で話し掛けた。

「どうしたのよ？あんな、そんな趣味あったの？」

でも、ショウは聞いてない。それどころか、写真を見ながらにかぶつぶつ言ってる。

アブないなあ……………

「ちょっと」

もう一回、つつ突く。

「なにぶつぶつ言ってるのよ？どうかしたの？」

ようやくそこで、ショウの目が尋常じゃないことに気が付いた。この目は、目グ標を追い詰めたときの目だ。でも、表情が違グう。もっと凶暴性を帯びた……………

そしてかすかながら、何を言ってるのかも聞き取れた。

「……………ようやく見付けたで……………こがな所に隠れとったとはな……………もう、逃がしゃせんで……………」

な、何なの、一体?!

こんな顔したショウなんて、今まで見たことない!!

一体、なにがあったっていうの?!

<以下、次号>

今回の表紙はC62です。これは私が児童館でバイトしてる間に読んでた「鉄道ファン」の近代蒸機特集に触発されたものです。蒸機。そう、蒸気機関車なのです。決して「えすえる」なんぞという、観光用に祭り上げられた衰れたらしい代物ではありません。ブツは同じ「缶（かま）」ですが、そこにはニュアンス的に大きな隔たりがあります。人は時に「人寄せパンダ」と言うこともあります。そりゃパンダに失礼ってもんで……しまった。話が逸れた。

蒸機は煤にまみれてこそ蒸機です。お召し列車用特別装飾車のあのピカピカはちょっとタンマするとして、昨今のイベント用に磨き上げられたSLは、関係者には悪いですが「魂が抜けた」存在でしかありません。……まず煙。これは黒いほどいいというイメージが一般的のようですが、それは誤りです。黒煙は火床の燃焼状態が悪い（不完全燃焼）か、石炭の質が悪いから出るのであって、パワーの象徴ではないのです。むしろボイラーの性能が引き出せていない証拠。100パーセントの性能が出せている時は、白く薄い煙を引いているだけ。蒸機現役時にはこの煙で、機関助手がベテランか新米かの判別ができたともいいます。今は前述の「誤解」がまかり通ってしまって、運転側がそれに迎合する傾向がある。それにもうもうと黒煙を吐いてた方が、絵になるしカッコいい。

この「理想的な火床」を作るのは、大変な経験が要ることです。なにしろ蒸機現役時には「投炭練習機」（実物大のボイラーの模型）が各機関区に設置されていたほどですし、投炭技術の競技会が毎年（だったかな）開かれてたし。そして、結構大きいスコップに、重い石炭を山盛りやすくって、かつ広い面積に均等に撒かなければならない。しかも、形式ごとに火床面積は違う。給炭口は狭い。労働条件としても最悪だったでしょう。暑いし。あの有名なD51も、機関助手（給炭手）にとっては悪夢のような缶だったそうです。というのも、運転室がせまくて、へたに腕を振る（広く石炭を撒くためには勢いが要る）と、壁に思い切り肘をぶつけて室内に石炭をまき散らしてしまうからで。ただ、その点を別にすれば大変扱い易い本線用貨物機だったわけで、それが日本最多量産数につながったのでした。その数1150輛強。……ただあくまでこれは日本最多の数値で、例えばドイツなんかだと1万輛も製作された缶があります。01系というんですが、車輛の大きさから見てもD51より上です。ケタが違うやね。

さて機関車が大きくなるにつれて、この「理想的な火床」を作るのは困難になってきました。テクニックの一つには、給炭口が開いた瞬間に吸い込まれる空気に乗せて「手前に叩きつけるように」投炭する、というものがありますが、これにも限界がある。日本一広い火床面積を持つC62にいたっては、一回の投炭で要求される投炭量が人力では不可能なレベルに達してしまいました。そこで開発されたのがストーカ。「自動給炭機」ともいいます。これはスクリュウの原理で炭水車からじかに火床へ石炭を送り込み、圧搾空気で飛ばして撒くというのですが、その構造上、圧搾空気のノズル周りはどうしても石炭が薄くなってしまいます。そこでここは人力で投炭してやらないといけない訳ですが、それでも機関助手の労力は相当緩和されたわけです。しかしストーカが登場したころには、既に蒸機は斜陽期に入っていたのでした。

蒸機はその全体から「機械」という言葉をイメージさせる何かを感じさせてくれます。潤滑油と、煤煙と、そして何より介在する人間の存在が感じられるのです。電機やディーゼルのような優等生臭さはなくて、あくまで凡人。人が手間暇かけてやらないと動かないという、ある意味劣等生的なところが、また魅力の一つなのかも知れません。逆に、この劣等生的なところが、エネルギー革命以来急速に姿を消していった原因でもあります。動力機構が往復機関の組み合わせであるが故のエネルギーロスの大ささ。コストパフォーマンスの悪さ。整備に熟練を要する……等々、実際に運営する側からしてみれば「うっとうしい」代物でもあったわけです。

模型の蒸機は煙を吐きませんが、とりあえず塗料で（ゲンゼから専用塗料が出ている）汚し塗装を施す程度のことはしてやりましょう。全体に薄く塗るだけで違ってきますよ。

# 真鶴レポート

5月1日、快晴——

毎年恒例、男女対抗戦、本番である！

その日の朝、栗田榛名は起き出して同じフロアの洗面所に向かう途中、井村真知子がすぐ目前で、明らかにわざと転ぶのに出会した。

「……!？」

不審に思うが、辺りに人の気配はない。浴衣の帯にはさんであるC z 75を確かめながら、とりあえず助け起こすことにした。

「一体何のつもり、怪しいマネは……」

井村は、無言で榛名の手小さく丸めた紙を押し込むと、礼もそこそこに立ち去ってしまった。

「……!?!？」

便所に入って紙を開いてみると、それは彼女が今までに集めた風紀委員関係の情報のメモだった。

「……!?!?!？」

榛名は首をかしげた。何で今さら？

彼女は一応憶えると、メモはちぎって流してしまった。

春日千明は、左の袖に安全ピンで止められている「風紀委員」と白く染め抜かれた青い腕章を直すと、女子部MS基地の棧橋区域に入っていった。チラと背後を伺うと、先刻から彼女をつけ回している二人の女生徒が目に入る。ちょっと目には普通の生徒と変わらないが、風紀委員会親衛隊の「私服」であることは、既に春日も分かっていた。そうまでして機密保持に躍起になる理由は、一体何なのか……？彼女には、遂に分からなかった。行くあてはすぐ目前である。まだ棧橋にタラップを降ろし、巨体を横たえ、煙突からは暖気運転の薄煙を昇らせていた。周りでは多数の、サブマシンガンで武装した風紀委員たちが警戒していて、とても近付けそうにはなかった。

彼女は、スカートの中に忍ばせてあった、押収品からくすねたサントリーのポケット壘を一気に空けた。続いて一種制服の上着の下、肩から吊るしてあったベレッタM92SBを取り出す。安全装置を外し、深呼吸。そして……

「ウラアアアアア——ッ！」

持つてる銃がアメリカ軍、突っ込む先が日本軍、関の声がロシア語だから、これはもうムチャクチャもいところである。

「止まれっ！止まれ——っ！」

尾行の二人が慌ててP-38を抜いて後を追う。何事かと周辺の委員たちが色めき立つが、対応は速かった。そばにいた者からメッタやたらに撃ち始める。それを半ば酔いの回った足で運良くかわしながら、春日は応射しつつ、着実に目標に近付いた。

女子部総旗艦旗をマストに掲げる「大和」級戦艦は、もうずいぶん大きく見えるのだが、一向に到着しそうにない。

ああ、大和は大きいな……

そう、ほんやりと思ったとき、足に熱いものが走った。

「ぎゃん！」

思わず悲鳴が上がる。上の方で何か連続した打撃音がしたが、それが何かは、春日に確かめる術はなかった。

——BLACK OUT.

そのごたごたと相前後して、対抗戦開始の合図である花火が打ち上げられた。滑走路で今か今かとこれを待ち兼ねていた女子部のB-70隊がフルパワーで離陸していく。パイロットの力みすぎでエンジンが焼き付きを起こした一機を残して、3機が30秒と経たずに全速のマッハ3に達し、男子部の迎撃隊に対応する間も与えずに滑走路へ通常爆弾を投下していった。彼女たちが帰投するまで5分前後の、文字通りあつという間の電撃戦である。もっとも爆撃精度もこれに比例して悪く、滑走路そのものに当たったのはたった2発だけだった。それも端の方だったから、実際の作戦にはまったく影響がなかった。

続いてB-52隊が第2次爆撃に出撃する。伊藤早苗のMiG-29隊も護衛に随伴する。伊藤は、つい先日の留学生との空戦のショックから、特に留学生たちの接近に気をつけていた。それに、このところの山猿ぶりが目に余る影山にも。データリンク関係の装備をF-15並みにバージョンアップしたかった彼女だが、そちらは生徒会に籍を置いていても、さすがに対抗戦には間に合わなかった。結局機種判定と勘だけが頼りとなる。

栗田はるなは、F-15による哨戒飛行に飛び立つ前から、風紀委員会の尾行がいつもより多いのに気がついていて。そして飛び立ったあとも、仲間のF-15三機の他に少し間を空けてRF-4Eが4機、ついてきている。普段は白根こだまだけなのだが……。彼女らがAIM-9Lサイドワインダーの実包を4発ぶら下げていることも、はるなは知っていた。待ち構えていたのだろう、どういうわけか眼下には少し前に出ていたはずの坂井法子のA-4隊。全部で12機だ。

「お客さんの多いことで……」

長門洋子がぼやく。

「あまり気を散らしていると、いざって時に応じられないわよ」扶桑和子が警告する。「もうそろそろ、男子部からお礼参りが来るはずだし……」

「それに、留学生の動き方がわからへん」霧島宏子が揚げ足を取る。「ヘタすると、じき来よるかも知れへんなあ」

「毛唐なんか屁のつつかいにもなんねえよ」長門は意気がった。「あの坂井に20本完封だもんなあ」

「それよ」はるなが言った。「どう考えたって変よ。曲がりなりにも留学生、今までだってあんなに弱いのは見たことがない。……理由はわかんないけど、でも」

「ワザとか」長門はすぐのみ込んだ。「……確かに、言われてみりゃな。変だ」

「中継見てて、気付かなんだんか!？」霧島宏子が呆れて、素っ頓狂な声を上げた。「ありゃ絶対、八百長やで！」

下で聞いていた坂井は頭から冷水を浴びせられる思いだった。あの日の試合の後伊藤の部屋に押しかけても、結局「あの交信」については答が得られなかった。今考えれば、あれは伊藤がワザと教えなかったのだ。それはそうだろう、行った時にはジェシが部屋にいた。それにしても、教えてくれるチャンスはいくらでもあったはずだ。それを教えなかったということは、一体ぜんたいどういう訳だろう……？

「来やがった！」長門の声で坂井の思考は中断された。「……IFFコード……毛唐だ！」

「あんまり毛唐々々言いなさんな」はるなの声には薄笑いさえ含まれていた。「さて、Now...it's show-time！」

はるなの完璧に近い、そして少しおどけ気味の英語を合図に、はるな隊のF-15はパッと散らばった。風紀委員会のRF-4がそれに続き、……そして、坂井と朝比奈のA-4が追隨した。

「朝比奈さん、あなたは隊に戻りなさい！」気付いた坂井が叱る。

「いいえ、お伴します！」彼女のテクを盗むつもり朝比奈は聞かなかった。「何と言われてもお伴します」

留学生の機体は4機固まって直進してくる。対するはるな隊は包み込むように散らばっている。ハタ目には、はるな側が有利に見えた。……留学生隊がミサイルを放つ。

「スパロー！」扶桑が言う。「……こっちにロックはかかってない……てことは！」

少しあって、風紀委員RF-4E隊は全滅した。ミサイルを避けられなかったのだ。続いてはるなたちが留学生の後を取った。1対1の空戦になる。

「ハエ退治には感謝するが……」長門の声が無線に乗って坂井にも聞こえた。鈍速の彼女は、まだ追いつけない。「要らん情けは無謀だな、死ぬやーっ！」

しかし何も起きなかった。長門の射弾を見事に相手はかわしたのだ。流れ弾で朝比奈の機体が碎け散る。双方実力が拮抗しているのか、その繰り返しが続くうち、留学生側はジェシ・ヘンリエタ以外の全員が弾切れになってしまっていた。ミサイルは双方全員尽きている。もつとも、はるな隊の方でももう弾の余裕は無いに等しかった。体当たりしてでもはるなを助けるつもりだった坂井は、そのはるなが放ったサイドワインダーの流れ弾で撃墜されている。仲間の弾切れを知ったジェシは、脚を降ろすとはるなを呼んだ。大きな捻じ山桜のマークではるな機だけはすぐにおわる。

「さむらい・リーデー、コチラハめいぶるれつど1、仲間ハミンナ弾ガ切レテイル。ココハ私トノ一騎打チデケリヨツケタイガ？」

「……了解」その時になって初めて、はるなは息が上がっている自分に気がついた。じつとりと汗ばんでさえいる。「一度離レヨウ」

「OK」

はるなにミサイルまで使わせる相手というのは、ただものではない。普通の相手であれば、彼女は絶対と言っていいほどミサイルを使わない。「所詮は曲がれるロケット弾に過ぎない」というのがはるなの持論で、それよりは機関砲の方が余程信用できるというのだ。それでもミサイルを携行するのは、「弾数が増える」からである。ただ今回の事情は別格だった。「こいつは長期戦になる」と直感したはるなは、身軽になるためと、万が一のごく薄い可能性にかけてミサイルを使ったのだ。

一度距離を置いたジェシは、機体をはるな機に向けると、すぐに名乗りながら照準器内に相手を捉えた。

「私ハぐれんらいおん・の一ふおーく校戦闘機隊々長、11年生、じえし・へんりえた！」

「真鶴学園女子部空軍総大將……高3、栗田はるな！」

今度は、勝負が一発で付いた。母国語での名乗りあいが終わった途端、ジェシ機の左エンジンが破裂したのである。続いて右。

「やった！」長門が歓声を上げる。「エンジン破り！」

「ここは一発、日本の秘術“木の葉落とし”で迎えたかったけどね」はるなは顔いっぱい湿っていた汗を拭いながら、深く息をついた。「……やれやれ、手こずった……」

伊藤早苗はそれと相前後するころに、男子部の上空でF-18四機の編隊の迎撃を受けていた。マーキングで留学生であることは判ったが、果たして男女どちらかまでは判らない。とりあえずジェシ率いる女子であることを想定して、気を引き締めてかかることにした。空戦中ではあったが、部下にも警告する。4機いたB-52の護衛は他の隊に押しつけて、さっさと対戦闘機戦に入ってしまったのである。もつとも大人しく聞く連中ではない。何せみんな若いから、ハナから勝算なしと見て本隊から離れなかったF-5E隊（8機）だけが残った。留学生は4機、対する女子部は8機。そこへ男子部のF-4E隊が駆けつけてきた。マーキングは、男子部空軍総大將。赤城広義以下4機である。男子部に限っての話、どの隊よりも強いと言われる班だ。留学生たちの士気も上がる。

「騎兵隊ダ！」誰かが言った。「主ノゴ加護ノアランコトヲ！」

「何言ッテヤガル、コチトラさむらいデイ！」加賀実が言い返した。「新撰組ッテ呼ベ！」

「バカ、そんな事言ったところで判るか」赤城が後席から野次る。「戦闘機には構うな、爆撃機をやれ！」

「遅い！」加賀は言いながら操縦環をなぎ倒した。「もう喰い付かれちまったよ！」

「ミラーージュだろうが！ファントムなら振り切れる」

「あ、何だって？」

そう言いながらひねり込んだ加賀は相手に射たせ、射弾を前に来ていた女子部機に流す。それでいて自機は無傷である。後ろの敵が慌てたスキをとって急減速すると、そのままスコープにしまった。あっという間に女子部は2機を失う。

F-4相手なら、MiG-29で充分振り切れる。そう見た伊藤は、彼らには構わず、まっすぐF-18に喰いついていった。喰いつかれた方は急機動でかわしにかかったが、同級機のMiG-29は大した苦もなく追従することができた。…そして、まず一機。

「グレンライオン・ノーフォーク校戦闘機隊副隊長、11年生、ローランド・ヨーク！」

伊藤の気付くのがあと少し遅かったら、確実に撃墜されていた。操縦桿を思い切り前に押し倒して弾をかわすと、留学生機のマーキングを施したF-18が横に付けてきた。

「じゃっぷ！イイ腕ダ、ソレナラ私モ安心シテわるきゅーれニ紹介デキルトイウモノダ」

その機のパイロットは、サムアップして見せながら言ってきた。してみると、彼がローランドなのだろう。

「私ハ…」名乗りかけて、伊藤はハタと考えた。自分には肩書きなんてものはない。…えいくそ。どうにでもなれ。「私ハ…真鶴学園女子部生徒会員、高2、伊藤早苗！」

「上等ダ！」ローランドは大きくロールして減速しながら、伊藤機の後ろへ回った。「コレドウダ！」

「甘い！」

横へ滑ってかわした伊藤だったが、すぐに被弾の振動に激しく揺さぶられた。そして射出。ホーネットの横に敵の隊長機が並ぶのが、降下中に見えた。…しまった…！

「野郎！」ところがローランドは激昂していた。「騎士道精神ヲ知ランノカ！」

「気取るな毛唐！」加賀が罵倒し返す。「今やってるのは指輪物語じゃねえ、実戦でい！」

「おい、言葉選べよ！」

赤城が後ろから口をはさむが、時すでに遅かった。売り言葉に買い言葉、二人が一騎討ちをおっ始めるまでそう時間を要さなかった。

女子部艦隊が出港してすぐに、井村の乗艦「まや」は煙突からもうもうと黒煙を吐き出し、本隊を離れた。機関故障である。実は風紀委員の動きを電子情報で追うために主港に居座るための工作だった。

…が、困難に陥った。主港に戻るなり、風紀委員から臨検通告を受けたのである。

「ヤバイよ！」井村は引きつった笑いを浮かべながら、有明みどりに言った。「臨検なんてされたら、今までやってたことが全部バレる」

「…なら逃げようよ」有明は平然と答えた。「臨検までするってことは、敵の作戦発動は今日だよ。さっき得た情報じゃ、『十字軍』が小田原まで来てるしね。クーデターがなければないで、それは大いに結構。提督先輩のところに行って、助けてもらおうよ」

「逃げるって…エンジンが、片舷使えないのよ！」井村はいよいよ焦った。「すぐ追い着かれるに決まってるじゃない！」

「大丈夫よ」有明はなお余裕で答える。「敵を欺くにはまず味方から。エンジンの黒煙は煙幕発生装置を組み込んだから。エンジンは無事なの。計器表示の異常は、私が自分の端末でいじったのよね。あとでまた直すのが厄介だから」

「…風紀委員の巡視船、来ます！」

砲術係が告げた。

「面舵一杯！両舷全速、本隊に進路をとれ！」井村が指示を下す。「…みどり、本当にあんたって、ドラえもんみたいな…」

「ダメです、間にあいません！」砲術係は冷や汗を浮かべていた。

「そんなこともあろうかと」有明はニヤリとなる。「エンジンにターボチャージャーを組み込んでおいたわ。操作板の赤いボタンを押してみて」

「さっきの撤回するわ」もの凄いのGで井村はふんばりながら、呆れを露にした。「真面さんね、あんたって人は！」

ものすごい加速で、井村たちは風紀委員を引き離していった。

春日が気がついてみると、そこは船の上のようだった。規則正しい上下動と、交互にやって来る横揺れがそれを裏付ける。……船……そう言えば、私は榛名先輩に……!

あわてて部屋を飛び出した。狭い廊下と、窓から見える艦船の群れが、ここが船の上であることを立証した。とりあえず艦橋、……上へ!

船内は思いのほか大きかった。階段を上がっても上がっても、まだ艦橋に着かないのである。いいかげん息が上がってきたころ、ついに明るいところに到達した。……人影が二つ。双眼鏡で前方を伺っている。その1つが気が付いて、振り返った。

「あ、気が付いた?」彼女は窓辺に寄りかかった。「……ピストル一丁で風紀委員の包囲を突き破ろうとした人は始めて見るけど……度胸あるわね」

「あ。こっちは南雲、私が栗田」もう一人が振り向いて名乗る。「で、あなた名前は?」  
とすると、ここは女子部総旗艦「酒匂」の戦闘艦橋か。

「春日……です」中途半端に高い所にいる恐怖と、二人の大物を向こうに回した緊張で、春日はどもり気味だ。「あの……私……」

「こっちが気付いて対空機銃の俯角射撃を始めるのがもう少し遅かったら、あなた今頃、風紀委員の自白剤責めに遭ってたわよ」榛名はにこやかに話しかけた。「……あなた風紀委員ね。一体どういう事?」

「風紀委員会は……クーデターを企ててます」春日は言葉を選びながら、ゆっくり答えた。

「詳しくは判りません……でも、私は彼らに同調することだけはできないんです」

「どおーも、ひっかかる」榛名はこめかみをひっかいた。「クーデターがある、だけでも内容が判らない。ここんとこそんなのぼっかりで……」

「風紀委員の会長は三河よ」南雲が分析を始めた。「勅使河原の子分……場合によっては、また洗脳してるのかも」

「一方で、離散者が出てる」榛名は反論した。「これはどう見る?あいつらが、みすみす戦力を失うようなマネする?やるんなら全員洗脳するでしょ」

「うーん」南雲は腕組みした。「あるいは、今回は親衛隊だけに絞ったとか」

「それかな。春日さん、風紀の上の方で、何か集会じみたものはあった?」

「わかりません」

春日は即答した。実際そうとしか答えようがない。いつも加越の班にいたのだから。

「……あ、そうか!ほら!」南雲は急にひらめいた。「彼女、加越の戦車隊にいたんだよ!だから離れてたんだ!」

「あ!」榛名は指を鳴らそうとして、失敗した。いつもそうなのだが。「だからか」

「でも、結局風紀の手口はわからない」南雲が話題を戻す。

「そう、それなんだよねー」榛名はくしゃくしゃと髪を掻き回した。ミカンの匂いが辺りに拡がる。榛名の髪のスースだ。「ねえ、本当に何か知らない?」

「いえ」春日は首をかしげた。「すみません」

「栗田先輩、敵艦見ゆ!」

初雁つばめから連絡が入る。

「よーし、戦闘だ戦闘だ。降りつかね」榛名は肩を揉みながら階段に歩いていった。「まあ、知らないんじゃないーねー」

そこへ、もう一つ知らせが来た。下にいる通信係からだ。

「先輩!女子部から緊急電!戦闘中止、至急全員女子部へ集合とのことです!」

「ピンゴ!」榛名と南雲は、同時に言って顔を見合わせた。「クーデターだ!」

だが、事態はすぐに混乱を迎えた。まるっきり逆の指示が、今度は男子部から出されたからである。出撃中の者、特に女子部は困惑した。通信回線が一気に満杯になる。緊急回線を選択した榛名は、その状況を打破しにかかった。

「静かにっ!……こちらは女子部総司令である!我々はこのまま南下、男子部へ向かう!状況から察して女子部へ集合せよとの指示はダミーである。空軍で飛行中のものも、この通信が聞こえたなら、可能であれば男子部へ向かえ!そうでない者も、救助は必ずやってくる!安心してベストを尽くすように!なお、今後私用の無線は禁止する。私用通信には

手旗及び発光通信を使うこと。通信回線は空けるように。以上！」

10数分後には、女子部生徒の7割近くが男子部に避難を完了していた。結局、ほとんどが交戦することなく突然の休戦を迎えたわけである。

「お見事」入港後「酒匂」の艦橋に移ってきた宇垣がほめる。「よく分かったなあ！」

「今回は純然たるギャンブルだったわ」榛名はしきりに額の汗を拭いながら、小声で答えた。「正直言って、入港するのが怖かった」

「……みんなには言わない方がいいだろうな」宇垣はあたりを伺った。「まあ結果オーライってところだろ」

井村真知子は最後に男子部に着いたグループの中の一隻だった。栗田はるなたちは、燃料と弾薬の補給に戻ったところを、風紀委員に監禁されていた。そして夕暮れまでに、坂井や春日、ジェシなど、撃墜されて女子部側へ降りたものは、すべて風紀委員会によって一まとめに集められた。

夕食が済んで春日が空母「ハイライト」艦橋の宇垣を尋ねると、そこは集散する情報と、それを「栗田艦隊」の幹部たちに伝える怒号が渦巻く阿鼻叫喚のるつぼと化していた。

名を呼ばれた宇垣はあんぐりと口を開いた。彼女の一つの癖なのだが、そんな事は春日に知る由もない。

「てめえ、こないだの……！」

「はい。こないだは失礼しました」春日は薄笑いさえ浮かべて、それに応じた。「実は、あの時のリターンマッチをお願いしたくて」

「ああ!?」宇垣の口は一層大きく開いた。それに合わせて目も大きく見開かれる。「てめえ正気か、このクソややこしい時に!？」

「もちろんです。日時と場所はおまかせします」春日は余裕で告げていく。「武器は、これで」「バカ！」

春日が肩のホルスターからベレッタを取り出したのを、宇垣は罵声で一蹴した。固めた拳で艦隊司令用のコンソールパネルにダンと大きな音を立てて立ち上り、春日を見下ろす。「お前な、決闘のマナーってやつをちゃんと勉強してから、そういう話は持ってこい。まるっきりアベコベじゃねえか」彼女は再び座り直して、足を組んだ。「まず、日時は言い出しっぺが指定しろ。使う武器は相手に指定させるのがマナーだ」

春日は一瞬冷や汗をかいたが、すぐに取り直した。

「わかりました。じゃ明日の午後3時半、主港でどうです？」

「いいだろう」宇垣は軽くうなずいた。

「で、武器は」

「そう焦るな」宇垣はニヤリとなった。「ま、思い付く限りの準備でもしてきな」

日が明けた。未だに風紀委員たちから声明は出されず、警官隊も来ていない。その朝は極めて静かに迎えられた。そして学校側が、安全策として男子部へ避難してきた全生徒にそのまま校内に留まるよう指示したことが、その後の明暗を決した。

春日と宇垣にとっては決闘当日。回りには物見高いヒマな生徒たちが集まっていた。丸く囲まれたその中で、春日は体操着を着て、肩からは例によってベレッタを吊っていた。宇垣は剣道が好きであるというウワサから、竹刀も携えている。……が、肝心の宇垣はまだ来ない。時間は3時半を少し回っている。

「……遅い」春日は呟いた。「一体何のつもり……！」

その時、群衆の一部がどよめいた。……宇垣の登場である。

彼女は第一種制服をラフに着崩した、普段の格好で現われた。つき従う手下がどこから持ってきたのか、食堂のワゴン車を押してきている。その上には新聞紙がかぶせてあった。

「遅いですね！」春日は高飛車に打ってでた。「何ですか、それは！」



「これが、武器だァ！」

宇垣は威勢よく言い放ち、新聞紙を引きはがした。

一瞬の沈黙。そして、どよめき。

ワゴン車の上には二枚の平皿、そしてその上には一本ずつのフランクフルト・ソーセージ。今日の昼定食に出ていたものだ。

「よく聞け。この二本のソーセージのうち一本には、化学室からくすねた青酸カリが注射されてる。もう一本は何でもない。どっちを取るかはお前さんの自由だ」

「あ、汚い！」春日が非難する。

「汚ねえもんか！」宇垣は一喝した。「こっちは当然の権利にのっとして、武器を指定したまでだ。さあどっちを取るんでい！」

「……お先にどうぞ」春日は尻込みした。何せ青酸カリである。

「じゃ、負けを認めるんだな？」宇垣の顔が意地悪く笑う。「こっちはどっちが毒入りか知ってるもんなあ」

「……」春日は食い入るようにソーセージと宇垣を交互に見比べたが、遂に頭を下げた。

「分かりました、降参です！だからソーセージは勘弁して下さい！」

「あ、そう。もったいねーな……」

宇垣は言うなり、まず一本目を平らげた。続いてもう一本。ぎよっとなった春日に、宇垣はニヤニヤ笑いながら教えた。

「バカ。このオレ様が、この程度の決闘で死人なんか出すかってんだ。これ以上先公なりサツなりに眼つけられたら、それこそ退学するっきゃねーしな」宇垣はそこで、一句切り置いた。「まだまだ読みが甘えな、ん？」

春日は腰が抜けて、その場にへたり込んでしまった。

同じ日の同じころ、もう一人へたりこんだ人物がいた。

影山の手下から連絡があつて、坂井は男子部校舎裏のとある場所にいた。人気はないが、坂井はずいぶん前からピリピリと警戒していた。コルト・コンバット・コマンダーを第二種制服のスカートに忍ばせて、いつ襲われてもいように準備を整えていた。4月末に影山の機体に体当たりを敢行した直後だから、その仕返しだとしか考えようがなかった。

影山が校舎の影から現われる。坂井の身体が硬張った。右手がサッとポケットの中のオートピストルに行く素早く抜き出してセーフティを外し、いつでも撃てるようにする。それを見て、影山の表情は少し陰った。

「そう警戒すんなよ」ボソリ、と彼は言った。「……読んでくれ」

彼は一通の封筒を渡すと、そのまま立ち去った。それが坂井に新たな警戒を巻き起こし、360°周囲を今一度確認させた。……が、何も起こらない。彼女はそのまま警戒しつつ、急いで初雁の「鳥海」へ戻った。男子部にいる間の部屋を提供してくれたのだ。

初雁立会いの下、「鳥海」の艦橋で封を切った坂井は、へなへたと座りこんでしまい、そのまま文字通り腰を抜かしてしまった。文面をそのまま記すところなる。

「好きだ。つき合ってくれ。返事を待つ」

「総員、戦闘配置ッ！」のぞき込んだ初雁は、即座に号令をかけた。「レーダー、接近機を片っ端からチェック！影山が来る！全砲門を棧橋に指向！対空射撃用意！」

「初雁、一体何の騒ぎ？」栗田榛名から確認が飛ぶ。

「影山が新手に打って出ました！」初雁も間髪を入れずに応答する。「心理戦です！」

詳しい説明を受けた榛名は、やにわに大笑いし始めた。

「安心しなさい、それはマジよ」ひとしきり笑った残響が、ひくひくと声に出る。「まさか、そんな程度の心理戦なんて……私や麻美ならともかく、坂井さんじゃねえ……！」

その交信は他の大部分の女子部艦船でも傍受されていた。話は一気に広まり、一夜と経たずに「影山、プロポーズする」というニュースは常識に変化してしまったのである。もっとも、女子部で起きたクーデターの方が、威力は強かったが……。

そして日暮れ時ごろから、男子部の校門前にも武装した監視が集まり始めた。もちろんクーデター側である。

「何もしないほうがいい」それを目にした榛名は、折に触れてそう言った。「もう、事態が……私たちの手から離れてる……」

この2日めの正午、勅使河原規子が真鶴入りしていた。前風紀委員長だが、今回はクーデター軍の総長としてである。

「私は……帰ってきた……」

パリッとした第一種制服を身にまとった彼女は、女子部にいる人質たちと手下の組員を前に、そう演説した。

「誰も頼んでへんで」坂井は周りに聞こえないように、そっと呟いた。

「ヒトラーの再来か……！」ジェシはうめいた。「クレイジー……」

クーデター発生後、3日が経過した。そして、男子部・女子部ともに充分すぎるほどの装備によって固められた監視集団が形成されたころ、ようやく声明が出された。真鶴市街近辺がまずクーデター一派によって封鎖され、それを取り囲むように警察によって封鎖されていた。彼らはいつの間に集めたのか小国の正規軍並みの装備を整えており、いかに「日本一実戦経験の豊富な組織」である機動隊と言えどもうかつには突入できないのである。自衛隊は前回のクーデター時に出動した経験をもつが、政治的理由によって未だ出動できずにいた。

そして、トマホークである。クーデター一派は大型トレーラーをトマホークの発射機に改造して、いつでも射てるように準備していたのである。女子部の校庭のど真中に設置されていたが、前回のパーシングよりも対応には慎重を要した。このトマホークは、前風紀委員長・勅使河原規子の実家が組長である銀龍会が、アメリカのマフィアを通じて入手したものである。銀龍会はまた、有力な右翼団体ともつながりがあった。核弾頭かどうかは、勅使河原以下ごく少数の人間しか知らない。警察側もつかみかねていた。そして、この一点で国会も膠着状態に陥ってしまったのである。ヘタをすれば核弾頭が東京と大阪を襲ってくる。かと言って、彼らの要求をのむわけにもいかない。カナダ人が人質に含まれていることが、事態を一層ややこしくしていた。前回のように海から自衛艦が艦砲射撃を加え、ランチャーを潰してから突入、という荒技はできない。ヘタに弾がそれで留学生に死者が出た場合、外交問題に発展するからだ。

クーデター一派は、日本国内にいる全政治犯の釈放と現行法すべての即時停止を要求していた。

電話線は切断されていて、真鶴と外部との通話は困難である。無線も、広範囲なジャミングがかけられては、あまり使えなかった。

結果、ゴールデンウィーク中、生徒は学校を出ることができなかった。男子部・女子部のいずれにいても校内で今まで通りに生活することは可能だったが、模型部の活動は不可能になった。縮小機の周りの警備がきつかったのである。逆に言えば、模型部の活動以外の日常生活——授業と部活——がクーデター側から強制された形になっていた。手持ちの拳銃（模型部で使用するショック弾用のもの）で反乱を企てるものの中にはいたが、大概是宇垣たちが察知して、事前に中止させられていた。

また、不思議なことに、男子部に逃げ込んでいた女子部の生徒たちはそのまま据え置か

れていた。女子部へ戻されなかったのである。彼女たちは女子部の艦船内に寝袋を持ち込んでスペースを取り、そこで寝起きすることになった。日用品は前例にならって、購買部や真鶴の商店街から供給された。

そして箱根や伊豆など近隣の温泉街もとぼっちりを受けて客足が遠のき、観光地図に大きな異変が起きたのだった。

ゴールデンウィーク明けごろから、男子部の方で妙な噂が校内に流れはじめた。

「栗田榛名の作戦の下、宇垣たちが反クーデターを企画している。そのために秘密義勇軍を募集している」というのである。しかしこの噂を耳にして榛名たちのところへ行ったものはみんな、「そんなことはしていない」と門前払いを喰ってしまう。しばらくして、「作戦名『ラインバックカー』が発動される」という噂がでたが、これもやはりデマらしかった。最後に、5月も10日すぎになって、「『ゴルフ・ストーム』が実施される」という噂が出始めた。今度は榛名たちが肯定も否定もしないということで、生徒たちの方も静かに準備をし始めた。警官隊はなおも動けずにいる。沖合にいる海上保安庁の白い船体が、何か空しさの象徴のようでもあった。

事態は静かに推移している。

クーデター「軍」の武装（すべて本物）

トマホーク巡航ミサイル（核？）12発…目標：東京・名古屋・大阪へ各4発

全て女子部に設置

装輪装甲車20台…市内巡視

各種ジープ・バン・トラックなど多数…雑用

チャパレルSAM10基80発

600人近い組員全員がRPG-7対戦車ロケット数発とAK47アサルトライフルを装備

勅使河原規子専用のメルセデスベンツ450SE（76年式・防弾仕様）

今回のPC及び主要NPC（保留3）

中学 男子部

1年A組 （東 大鳳）

女子部

2年A組 有明 みどり 井村 真知子 白根 こだま 早坂 理絵

高校 男子部 普通科

1年A組 （榊 裕） 立花 陽明

2年A組 影山 翔

3年F組 加賀 実

理数科

2年H組 沖田 悟 菅原 絵馬 鳩山 平和

3年G組 赤城 広義

女子部 普通科

1年A組 朝比奈 美雪 春日 千明

2年A組 伊藤 早苗 加越 京子 坂井 法子 初雁 つばめ

F組 永野 伊勢

3年D組 霧島 宏子 栗田 はるな 長門 洋子 扶桑 和子

F組 宇垣 麻美 如月 まどか 栗田 榛名

理数科

1年H組 （天本 伊織）

留学生 男子 11年生 ローランド・ヨーク  
女子 11年生 ジェシ・ヘンリエタ

その他のリアクション ( )内はキャラがいる場所

- ・有明みどり (男子部)  
特にすることもなくなり、ブラブラして過ごす。
- ・井村真知子 (男子部)  
その他特記事項なし。
- ・白根こだま (女子部)  
風紀委員上層部に従い、生徒を監視する側に回る。
- ・早坂理絵 (女子部)  
その他特記事項なし。
- ・立花陽明 (男子部)  
その他特記事項なし。
- ・影山翔 (男子部)  
その他特記事項なし。
- ・沖田悟 (男子部)  
生石灰に水をかけると発火するかの実験を行う。粉末に少量の水を滴下すると高熱を発生して水蒸気を生じるが、炎は出ない事が確認された。
- ・菅原絵馬 (男子部)  
交戦が起きなかったので練り上げた戦術はついにはずじまい。クーデター発生後は初雁に自分の隣の泊地を提供、彼女と連絡を密にして「栗田艦隊」の動きを入手する。剣道の練習を強化する。
- ・鳩山平和 (男子部)  
することもないので、菅原の剣道の練習につきあう。
- ・朝比奈美雪 (女子部)  
人質としておとなしく過ごす。弓道の昇段試験に備え、練習を強化する。
- ・春日千明 (男子部)  
榛名の「酒匂」に部屋をもらう。

- ・伊藤早苗（男子部）  
その他特記事項なし。
- ・加越京子（女子部）  
その他特記事項なし。
- ・坂井法子（女子部）  
その他特記事項なし。
- ・初雁つばめ（男子部）  
クーデター発生效后、如月まどかと協力して、栗田艦隊にまつわる「変な噂」をまく。

※主要NPCのいる場所

男子部…赤城広義 宇垣麻美 加賀実 如月まどか 霧島宏子 栗田榛名 永野伊勢  
女子部…栗田はるな 長門洋子 扶桑和子 ジェシ・ヘンリエタ ローランド・ヨーク

## 校長から

今回をもって「水増しキャラ」制度は廃止します。やはり私自身のキャパシティをオーバーした制度だったわけで、関係各位には多大なご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。なお、行動コマンドが継続的にかかっていた早坂理絵だけは、PC扱いで残します。あとは、今まで義務づけていた「調査書」の添付は廃止します。今後はB5サイズの紙に「その回の行動」と「運」「異性への関心」の数値を書いてもらうだけで結構です。「調査書」は4月の進級時に、身長などの新データを新しく設定したものを送ってもらうだけにします。

今回はやりにくかったなあ。風紀委員のクーデターっていう大イベントが5月1日（木曜日）にあるという頭デッカチの配置で……。ああしんど。

それと変なアクションをかけた人が……。だれとは言いませんが、別のキャラとのからみについて、頭から終りまで「作って」しまった人がいます。それはそれで私としても楽チンでいいのですが、認めてしまうと以後「悪用」する人が出るはずなので、却下しました。やるならやるで、それと知れずそうするしかないようアクションを組み立てる、「オーバーシュタイン的」な計略が必要でしょう。

今回は5月後半。果たして自衛隊の治安出動はあるのか？それ以前に警官隊に動きはあるのか？真鶴市民の安全は？そして自分たちの運命は？女子部に搬入されたトマホークは核弾頭なのかどうなのか？自分たちだけで風紀委員とヤクザたちを撃退できないか？夜間（でなくてもいいけど）隠密行動で警官隊のいるところに逃げ出すことも、挑戦することは可能ですし、9割方あるであろう栗田艦隊の武装蜂起に参加するのも可です。

そして、クーデターが解決したあかつきには、連休の分の休日が振り替えられますから、その時どうするか……等々。やることはいろいろありますね。

あと、そろそろPC自己紹介をやってみようかと思えます。「調査書」に全部書き込んだものをこっちでそのまま載つけます。とりあえず最初は影山翔君、よろしく。その続きは「テレホンショッキング」システムで行くので、指名してください。

大暴露！

## 空技廠スタッフ紹介《その3》

今回は前回載せられなかった、空技廠本部以外のスタッフの紹介を行ないます。例によって備考は自己申告に基づいて菊地が作成したものであり、また似顔絵はほとんど自画像で誇張等が多分に含まれるため、必ずしも実物と一致としてはいないことを、ここにおことわりします。



(その1)

なかじま ひとし (イラストレーター)  
昭和48年1月平日生まれ  
山羊座。男。市原市在住。学生。  
「北総新撰組」先任  
PN：謎の黒幕 (またはKRM)

持病：頭痛、乱視、変執狂、狭所恐怖症  
極度の低血圧

好物：多すぎて書けない

嫌いな物：猫、漬け物、原付スクーター、くそがき、現在の社会風潮、(コンピューターの暴走)、快眠中に起こす奴、愚者全般

備考：コミケにおける空技廠の総代理店でもある「北総新撰組」の親玉。また、「SONIC DIVER」内で連載中の「榛名とはるな」で非常勤の挿し絵かきをやっている。旧日本軍機を書かせたら、空技内でおそらく右に出るものはいない。また、艦船がかける数少ない人材でもある。



(その2)

鹿島 久義 (文章書き)  
出生日不明 男。横浜市在住。高校生。  
PN：Damyam=Kizaki (空技内のみ)

持病：不明

好物：X、ドラムス、ネットゲーム  
クトゥルフ(?)

嫌いな物：不明

備考：来年は受験生。今回の連載で空技を辞めることが確定した。菊地以下関係者のイビリを一年間耐え抜いた、ガッツのある人。遊演体ネットでは「Xeus世界」なるブランチでほとんど中心人物化していた。

# Damyan = Kizaki's Road of The Messiah

Road № 8 "Leviathan"

Written by Damyan = Kizaki

## Prologue

恐くない、と言ったら嘘になるな。

心理学で言うところの“盲目的恐怖”って奴だっけ……俺たちのいる、この涼しい洞窟の全体を支配している静かな風の正体こそが、まさしくそいつだった。

ステンに……ランチャー……空冷式の新型小銃……銃器オタクじゃねえ俺にゃ判別できねえがな……手榴弾に……サーベル……何かの革でつくった宇宙服モドキに……ポセイドン……そして一つしかないめえの体……それが、銀の船襲撃部隊の全てだ。マディの野郎は何考えてんだ!? 相手は全長数千キロだぜ。3日前に、ウエストミンスターだのサン=ピエトロだの、敦煌だの東大寺だのを消し炭と化してポセイドンの地球脱出をあきらめさせた奴らの対空火器に対してこれじゃあ、まるつきりランボー並みの戦力差だぜ。

「すまん、ダミー君。あんなコトをされては我々も警戒せざるを得ん。条件は難しくなるが、海からのトランス突入に切り変えよう。志牙君にはすまないが、一時スーパーミルク中毒になってもらう」

哀れにも(?) トランス能力増幅剤漬けにされる破目になった志牙の力によって大気圏をジャンプする……ヘマでもすりゃあ、太陽のド真ん中にでも実在化して正に Dead End だな。

俺にだって、もう選択の余地がねえコトぐらい分かってる。一組織のボスがんなコト分かんなくてどーするってんだ。電子計算機にやまず効きそうにない I C E 崩壊プログラムにニセ情報射出機構、あげくの果てには今さら移動端末の改良版を必死こいて作っている新尾崎とか南船、技術者グループ……大した情報もないのにアルダの助言をもとに作戦を練っている……いや、練っていた俺達ヘッドグループ……ケッ、溺れる者は何とやら……全くその通りだな。

所詮、人間なんて弱っちい存在だ。いざと言う時に大したコトもできない、弱っちくってバカバカしくてクソみてえなモンだ。ゆうき? しんねん? んなモンがどこまで出しゃばれるか、こいつあ見物だぜ。

ろくでもねえパペットどもが、どこまで主人

(Destiny)

に逆らうコトができるか……見る価値あんぜ、スターウォーズの新作なんぞよりもな。

おい、クソいまいましい風ども。

どう思う? マジで、人間は弱っちいモンだと思うか?

ああ、そうかい……

人間なんて、な……

## I

鋭い風が、俺だけを避けて流れ行く。

口内炎のできた唇を、思い切り噛んでみる。涙が眼球を溺れさせるほどの痛みと、持つていきようのない碇が、これが現実だというコトを俺に教えてくれた。

この1年ですっかり傷ついた聖剣を肩にかつぎ、俺はオーロラの輝く夜の砂漠を歩いている。別にどこへ行く訳でもない。良く言えば気ばらし、悪く言えば現実逃避ってトコかな。ありがたいコトに、聖剣が“眠っている”今は、何の不自由もなく、何の障害もなく

歩くことができる。幸い、俺の今の心には“いつもの奴”が付け込む余地はないので、あん時みたく“狂う”コトはないだろう。

もう、洞窟が砂の海のどこにも見えないほど歩いてきてしまった。そのうち、心配症の連中がスチームバイク持ち出して、俺を必死こいて捜すことだろう……まったくおめでてえ野郎どもだぜ、地球の命運よか俺をとるか？へっ、究極の選択までとはいかぬえが、な。

もう歩くのはやめた。

俺は防寒マントを適当な平地に敷き、そこに寝っ転がった。俺の身長に合わせて、かなりでかく作ってあるので、砂がほとんど気にならないのがいい。真っ黒に焼けた腕を頭の後ろにまわし、足を投げ出して、“綺麗”とは言い難い色に輝く黒天を見上げる。あのクソオーロラのせいで、星がぜんぜん見えない。いつの間にやら、風も止んでしまっていた。

意識はあるのに、ほぼ完全な静寂を感じる。

「気に入らねえな」

ペンタスの連中が置いていったあのガラクタは、本当にこの世界に役立つのか疑問だが、まあないよかマシだろう。あれは洞窟の一番奥に既にタイマーセットしてあるので、もしみんな塵になっちゃったとしても、勝手に作動する……といいのだが。

チッ、曇ってんだか晴れてんだか、さっぱり分かりやしねえ。

気に入らねえ。

ま、こんな空の下でもラヴコメやってる奴はバッチシやっただろうな。こんな切羽つまった状況だからこそ、つてのは俺にも分からんでもない。そもそも“愛”つてのは、自分の“弱さ”を誰かに隠してもらおうための心理行動だ、と俺は理解してる。ま、別に心理学やった訳でもなく、てめえで勝手に考えついたコトなので、これが正解であるとは思わない。ただ、これを基準にして奴らのコトを考えると、やっぱ想像ついちゃうな。現国赤点の俺には説明し難いけど、……俺たちはこれから“墓場”に向かう。誰も葬ってくれない、残酷に言うと、誰も来ない墓場だ。そして、ゾンビに喰われるコトなくそこから帰って来れる確率は、今ントコないに等しい。五体ズタズタにされて、小間切れになって水素とかと同化するのがオチだ。

でも、そこが人間の悲しき性、何だかんだ言って、連中は“生きたい”のだ。自分は“弱い”から死ぬんであって、それを防ぐにはその“弱さ”を隠してしまえばいい。それを無くせればいいが、その場合は“人間”であるコトをやめなければならない。なぜなら、“弱い”のが人間であって、“弱さ”が人間の本能の本質だからだ……何だかんだ言って、結局コレもてめえで勝手に考えたコトだがな。とにかく、それが原因で、人としての弱さを一時的にでも包み隠してくれ、自分が“強い”ものと錯覚することのできる“愛”という心理的行為がより必要となってくる訳だ。まったく、でたらめ紛いの単語、熟語の羅列でも、トーションが見りやらしく見えるんだから、言葉つてのはホント面白いモンだぜ。こんなんで赤点じゃ、笑っちゃうよ。

はっきり言って、俺はそんな奴らを良くは絶対思わないし、そうだろうとも思わない。俺はすでに“人間”であるコトをやめさせられている。“恐怖”もなけりゃ“愛”もない。一見便利そうに見えて、実はものすごく嫌なコトなのだ。もう大体なれちまったがな……ま、俺は26年生きてきて、そんな奴ア見たコトはない。つまり、俺と同じ苦しみを持っている人は今ントコいないらしいので、この、まず言葉にやできない苦痛と圧迫感が完全に分かる奴は皆無つて訳。だからといって、俺は李徴みたく自嘲的になるつもりはないし～無意識にそうなってるかもしれないが～、自殺しようなんてこれっぽっちも考えたコトはない。俺は俺なんだから、俺を最後まで貫き通せばいい。たとえその“俺”が、この世には認められぬ異型のものだったとしても、俺が存在を維持するにはそれ以外に方法がない。

……何だ？

休ませるつもり頭の頭をこき使ってる自分に気づいた俺は、一度思考を止めて、いつの間にかつむっていた眼を再び開き、生を嘲笑うかのように輝く空を睨みつけた。

何だかんだ言って、俺の望みは一体何だ？



こう考えてみよう。確か深層心理とやらでは、外面で否定しているコトを逆に望んでいることが多いと聞いたコトがある。そこで、俺がさっき否定した事物を逆に考えてみる。あまりにあっけなく、バカバカしい答えが出てくる。

なれもしない“人”に、俺はなりたいたんだな……

ケツ、理論、それもマジかどうかも分かったもんじゃなくクソ理論に、俺の心を左右されてたまるかってんだ。バカも休み休み言いな……俺は別に妖怪人間じゃねえ。ただの人だ。

しかし、ある部分で、俺の頭と体のある部分で、俺は異物のようだ……

知るか、んなコト。

俺は鼻を鳴らし、誰もいないコトに今さら気づくと、いまいましてになって砂に唾を吐いた。オーロラの死の明かりで、濡れた砂の黒ずみがよく分かる。今は唾だが、今にそれが涙と血に取って変わられるだろう。

俺はグラサンを外して、立ち上がった。

両手がジーンズについた砂を払い落とそうとケツにてをやる前に、俺の蒼い瞳に、砂の大地に立つ1人の女が鮮やかに映った。

俺の知ってる妹は、小学生にしちゃえらく背の高くて、ほんの少し胸が出っ張り始めたショートの子静かな12の娘だ。そこに立っていたのは、髪をブロンドに染め、肩を容易に包み隠せるほどのロングをボマヘッドとスプレーで逆立て、ハーレーのライダージャケットにレザーパンツ、黒革のウエスタンブーツで身を固めた、いかにも気の強そうな鋭く切ない瞳の女だった。身長は、女のくせに180を軽く越えているだろう。しかも背にウィンチェスターもどきをくくりつけた彼女の左眼は、えぐられて二目と見られぬ姿となっている。

女は、なぜか泣いていた。

手を差しのべ、俺に向かって言葉を吐いた。

「兄貴」

俺は“愛”を必要とする者になるコトができるのだろうか？

不思議なコトに、次に俺が目を開けると、そこはオーロラの七色に彩られた砂の大海ではなく、パイプのデスクとベッドが入れられた殺風景な狭い部屋～ポセイドン内の、俺が割り当てられた部屋～のベッドの上だった。さらに不思議なことに、不動のはずの地面が、わずかではあるものの揺れているのだ。

俺は靴もはずかずに、鋼鉄でガードされた厚い窓ガラスに飛びついた。

バカでかい鯨が、こっちにガン飛ばしていた。

それに追いつくのをかけるように、俺の耳に、聞こえるはずのない声が聞こえた。

「鬼崎リーダー、鬼崎リーダー、目覚ましにどでかいのをお見舞してあげましょうか？作戦開始まで、あと24時間を切りました。至急集会室へ！みんな、青筋立てて待ってます夜……繰り返します、鬼崎リーダー、至急集会室へ……」

俺は、もう一度口内炎を噛んだ。

涙が出るほど痛かった。

## II

志願者は20人。俺が率いる10人の宇宙服はオレンジに、西風が率いるもう10人の服は白く塗ってある。ジェドとかの出張ダイバーが背負ってく移動端末には、あっちとこっちのステッカーがベタベタはられ、ギブスばりに機関製作チーム全員のサインが書いてある。その内の一人の南船が、20人の“出張”チーム全員と激励の握手を交わしているところだ。ムチャクチャプレッシャーがかかっているはずの志牙は、向こうで正座して、精神統一を図っているようだ。ポセイドン居残り組を含めて、連中、みんなヤル気なのはいいけど……まあ、革の宇宙服もあっちの技術者に手を加えてもらい、いくらかマシンモノ

になったし、志牙の精進のおかげで、一つぐらいは余計に武器とかを持ってけるようになった。…結局、それらは勝算のあまりの無さの前に、煙のように打ち消されてしまう。月に影をつくるほどの連中に、たかだか20人のトーン野郎の熱血バカどもが殴り込むなんざ、チャック・ノリスも嫌がるコトだろうな。まあ、何だ。俺はここまで話を進めちまった張本人であるからして、責任は取らねえといけない。結果はどうあれ、少なくとも、俺の気は済むと思う。

「…私からは、言うことは何もない…いや、これだけは言わせてくれ」

マディの短い演説の最中、まずいコトに俺の思考は、戦いの結果とは全然違った方に飛んでしまっていた。砂漠で見た、あの女のコトだ。大田原とかに聞いてみても、「そんな女性は、俺たちは知らねえな。すくなくとも、そんなカッコしてりゃ、すぐXeusの警察にとっ捕まるかして、かなり目立つはずだからな。ハシーシのやりすぎじゃねえか？」

チッ、俺はてめえらと違ってヤクなんざやんねえんだよ、分かってんのかオラ!?しかし…ありやあ一体何だ？幻覚にしちゃあ、記憶はモロにハッキリしてる。それに…もしあれが…本当に俺の妹だったら…クソッ！俺はこんな状況で何考えてんだ！俺は10人の命を預かってる身、これ以上ないってくらい、マジになってやらねえと…てめえも死ぬな。へっ、このマジな気持ちってのは、あっちで受験だの就職だのってわめいてる連中にゃ、一生分かんねえだろうな。命なんか、これっぽっちもかかってねえんだから。悪イけどな…ま、俺も一応大学出だから、人のコトなんざ言えねえけどよ…それに、あっちはもうそれどころじゃねえはずだ。あっちの技術者は、もう一般市民全員が避難を完了し、あとは逆時空嵐発生装置の作動を待つのみ、と言っていた。ま、こんな危険なトコにゃ、一人も逃げてこねえけどな…ここじゃ、命が9個あったって足りやしねえ。何か、あっちの装置でもテロとか“燃料”の次元水晶って奴の不足とか、いろいろトラブルが絶えなくてけっこーヤバイらしいがな…とにかく、天災の処理はペンタスとかにまかせて、俺たちは人災を…異星人災か？まあ、そいつをどうにかするって訳だ。あっちと違って、ハナっから勝ち目なんざありやしねえがな。各地のレジスタンスからは、未だに何の連絡も来ない。あの放送だけじゃ足りねえってか。んなら、体で分からしてやろうじゃねえか…見てろよ！やってやるぜ。

「必ず、必ず全員、生きて帰ってきてくれ！」

マディはそれだけ言うと、俺と西風の肩に手を置いて、後に下がった。

「…いくぜ、ダミー」

「んなコトぐれえ分かってんよ、ナンバ野郎」

俺は、改めて前を見た。へっ、どの顔もガッチガチじゃねえか…ま、いつか。

「Go Ahead！てめえらア、気合い入ってんだらうなアッ！」

「オオオオオオオオオオ!!」

「るっせーんだよ。まあ何だ。骨は絶対拾ってやらねえかんな、てめえで拾って帰ってこい！作戦説明は覚えてるな、んじゃ…作戦開始といくか。新尾崎に南船、サポートパッチシ頼むぜ！」

「つたりめえでしょ！」

さあつてと… Show Timeといくかい。

「行こうぜ、ダミー」

…

「作戦開始！志牙アッ、トランス開始ッ！西風たちのチームは21ブロック、俺らは6ブロックで待機！気イ抜くんじゃねえぞ！」

声は、ミルク色のエネルギーに遮られた。

黒。

闇。

次の瞬間、俺の眼に飛び込んできたヴィジョンは、ただの真っ暗闇の空間だった。

チッ、志牙の野郎……しくりやがったな……にしては、全く星が見えないのはおかしい。地球さえも見えない。

まあ、胎内とはちと違うだろうけどな。

立とうにも、固いものが全くない。しかも、これじゃ上がどっちか、さっぱり分からん。このままじゃ酔っちまってゲロゲロだな。

あれ？宇宙酔いって吐くんだっけ？

「き……ガガッ鬼崎さガリッ……鬼崎さん！」

出張ダイバーの富山だ。

「おう、こっちは生きてんぞ」

「鬼崎さんガガッガリガリガガアッ……ここはガリッ銀の船のバリバリッ中です」

「あんだと!？」

「リーダーガリガリッそれはマジッすよ」

「智明か」

「俺のガリッピーコンからするとガリバシッそうなりガガガッます」

だんだん、眼が暗闇になれてきた。

「フーコトは？」

「ガリガリガリチッ安モン通信機ガリガリ」

右上～俺から見てだが……ホントに右上でいいのか？～の方に、光が見える。

「あの光が、銀のガリッ船の本バシッ体で」

「んじゃあよ、こりゃハリボテって訳か？」

「そうでガリガリベリベリ」

クソッ……まんまと俺たちをペテンにはめやがってよお……畜生エイリアン野郎め、見つけたら千回シメんぞオラアッ！

でも……どないしょ。移動銃なんぞ持ってねえぞ……

「鬼崎さんガリッ今、船の本体のバリッ中です！今、回収ガリガリしますから！」

「さっさとしてくれよ土竜のあんちゃんよオ……ビッグサンダーマウンテンよりとんでもねえぞこいつは」

マジに気持ち悪くなってきた。

やれやれ……とんでもねえなコリヤ。

### Ⅲ

まだ、足がおぼつかない。

「だあーっ気合入れろよ俺の足イーッ！」

宇宙服の上から震える足をひっぱたくと、俺は壁を蹴って進み始めた。いっしょに牽引ビームで回収された5人もそれに続く。別方向から回収された4人も、6ブロック、すなわち機関部の第1セキュリティに向かわせるよう行っている。

俺たちの主任務は、機関部の占拠だ。

西風達は、司令部占拠とウエストコーストの掌捕だ。

「リーダー、右！」

「おうよ」

戦闘用オートマトンの顔面に鉛弾をブチ込んで、流されそうになった体を支えつつ、前に向かう。もう4体は殺ったかな……そのうち、ジェイソンみたく奇襲してやろうか。

頭の中で、光と闇とがグルグル回っている。まだ、体は回復しきっていない。

「チッ……気に入らねえな……」

俺は、アリみたいなオートマトンどもに、アツアツのパイナップルをプレゼントしてやった。

爆風をよけて、さっさと進む。

すでに、6ブロックのセキュリティシステムは、オートロックされた金属扉を残すのみとなっていた。

「かかりそうか？」

富山が機関からコードを伸ばし、扉のメカの部分に器用につないで、簡易キーボードを必死に叩いている。

「うんにゃ、もうすぐ……よしっ、ひらけゴマ！」

音もなく、扉が横に消えていく。

「全員いるな!?よし、行動開始ッ！散らばるなよ！」

俺は、ちぎれたオートマトンの生首を蹴飛ばした。とにかく、ゴミだらけだ……こりゃあ、粗大ゴミ屋も嫌がるぞ。

天姫と藤丸が、刀片手に切り込んでいく。

「おいおい、あんま先行くんじゃねえよ」

「大丈夫ッよ！機械人形なんぞ、天姫流飛燕剣のサビにしてやらあ」

そう言って天姫は、銃を構え進んできたオートマトンの首に正宗を喰い込ませた。後方のステンの咆哮が、奴らを蜂の巣にしていく。今ントコ、問題はなさそうだ……ザコばかりで、

「おい、藤丸」

「何スか、兄貴」

奴は振り返らない。

「おめえ、ファミコンとかはやるか？」

「え……何スか、いきなり」

「いいから」

「ええ……そりゃあ、ちつとは……ストIIとかも一応ガイルでやってるし……」

「そういうモンにゃ、ザコとボスがつきモンだよな」

「そりゃあね」

「リーダー！何話してんですか!？」

智明が割り込んできた。そりゃあ、たりめーだな。

「ああ、だからよ、戦闘にゃザコとボスがつきモンだつてコトよ」

「え……それって」

「第2セキュリティだ！」

俺のくだらねえ会話は、ものの見事に中断され、すぐさま鉛弾と刀が空を舞い始めた。

「チッ……しゃーねえなあ……」

俺はぼやきながら、向かってきたアリの手首にダークブレイカーを叩き込んだ。

「富山ア！ロック解錠ヨロシクウ！」

「アイ・サー！」

へっ、気どりやがって。

## Epilogue

「楽勝ッスね」

天姫は、気楽そうにとんぼ反って見せた。

「おいコラッ！兄貴にブッ飛ばされんぞおい」

藤丸の奴も一応止めさせようとはしているようだが……まるでゲーム感覚でやっている。

ま、こいつぁゲームみてえなモンだけどな。もう、あらかた扉は開けちゃった……200メートルは進んだかな。罅罅にゃ、スプラッターも真っ青のオートマトンのかけらでいっぱいだ。オレンジの服も、奴らの返り血で真っ青。

青。

冷たい臭いがする。

冷たい空気は、嫌な予感。



# 三 等 雑 居 室

## 奏愁学園。

☆やっぱり奏愁学園の栗田姉妹は菊地さんでしたか。多分、そうだろうとは思ってましたけど。ちなみに私のキャラは6/30の合同体育で、一騒動起こした1-Hの娘です。ところあのPBMって、どう考えても途中参加は無理だと思うんですけど……。

(神奈川県・渡辺喜一郎)

么：……おしまった。最初に参加権抽選があったのキレーサッパリ忘れてた。……というわけで、前回の記事を見て連絡を取ってしまわれた方、深くお詫び申し上げます。

ところで、私のPCは妹のはるなの方だけです。家族構成欄には、双子の姉として榛名の方も書いといたのですが、これがNPCとして採用されてしまったと。他にも設定ルール上、あの二人はオリジナルからかなり離れたものになっています。はるなは本当は柔道の方が得意(必殺技は内股)なのですが、技能に柔道ないしね。で渡辺さんのキャラは、話からすると三月弥生さんでしょうか？

## ストII。

☆ストIIがキャラだけで持っているとな。それは間違いでしょう。確かに魅力的なキャラがたくさんいますが、本当の魅力は、対戦にあるでしょう。やったことがある人しかわかりませんが、あのかげ引きは非常におもしろいです。対コンピューター戦ばかりやっても、真のおもしろさは見えないでしょう。一度、同じレベルと思われる人と対戦してみなさい。きっとそのおもしろさがわかるでしょう。(林さん、機会があったら対戦しましょう。弱いかもしれませんが)

(神奈川県・蔵田昌弘)

么：屁理屈になりますが……同じレベルと思われる人って……そんなのいるとは到底思えませんナ……。今時ゲーセンで私如き「トーシロ」がやっているはずはない(その余地もない)し、私の周りでスーフアミを持つてる連中は全員ストIIフリークなので。今更「やらしてくれ」というのも恥ずかしいしアホらしい。かくて菊地は益々ストIIから離れていくのであります。なお、今号、別ページでストII体験記を載せます。アニ研の宿舎(伊豆)にて一回やったので、「こんな奴もいるんだぞ」的な意味あいも込めて。

## SW。

☆かんげーないけど、真尾まおといっていると、ストIIがキャラで持っていると言えないと思うぞ。(笑)

私は「SONIC WINGS」はにがてだ。いつもハリアーを使うんだが……全然先に進めん。

(神奈川県・蔵田昌弘)

么：その矛盾こそ、菊地が菊地たり得る、最大の秘訣なのであります。……「わがまま」とも言えるけどネ。SWとストIIの違い。それは、私がプレイした場合、「ストIIは一面もクリアできないが、SWは二面くらいならできる」ということ。これは結構大きい違いだぞ。

☆SWではやはり、F-14、F-18、F-15、ビゲン、トーネード、グリペン、F-16、ハリアーIIという順番(編註・使い易い順)になりました。真尾まおの夢おちエンディングは見ましたか？

(愛知県・井村和正)

么：……使い易さそのものは多分そうでしょう。ただ、前回も言った通り私やアメ公は嫌いなので……。露助も嫌いだけど。あと、私はおよそゲーセンにあるゲームの「エンディング」を出したことがありません。一度だけ、店のオヤジも呆れ顔のコンティニューしまくりで「何たらFOX」のスタッフクレジットを出したことはありますが……。

# STREET FIGHTER II



◦ 金に実家に帰るとみるに弟が  
 スーファミを買っていた。当然(?)  
 ストIIもあっての「ほほう、これが  
 噂の…」と思ってちょっとやってみました。  
 ……昇龍蹴(今はいいか?)も竜巻旋風脚も  
 儼然にこなせたり私、一体…  
 ニアイ私にはこのゲームは向かい。

(シューティングも難手だなー)

◦ でも春麗とたより謎のインド人(と私は  
 呼んでいる)のダルシムが好きだなあ。  
 たんなら愉快で。

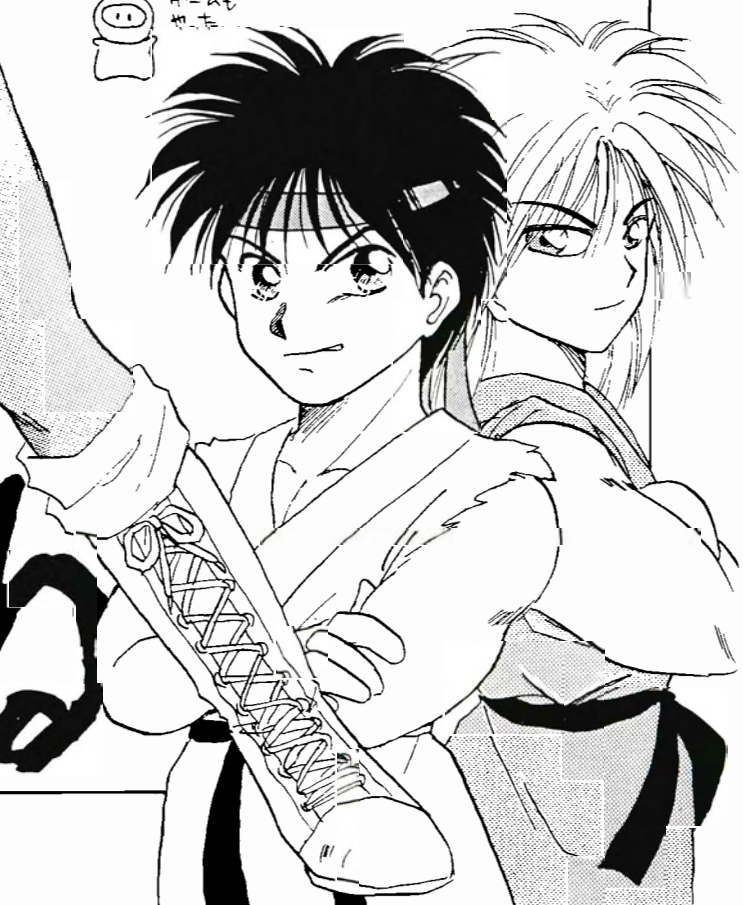
◦ 私の周りでもストIIにハマってる人  
 結構います。皆さん親指を大切に。

さいかす  
 さいかす

◦ ニアイ(今は  
 運うか?)  
 ナルシムも  
 やった



1992年9月某日 ただのりな



格闘的

么：このイラストは、ただのさんの好意（私信だけ読むと悪意にも見える）によるものです。……同志がいたー……！「こんなゲーム」って、多分ボンバーマンでしょう。これも私はやったことないけど。「赤は皇帝専用機」……って、渡辺さん（神奈川）しか判らんネタをふってどうする。

## ソノケン。

☆（前略）園田健一の「プライベート・ライヴ」って本買ったんですが、それに載ってる「プライベート・ライヴ」という話、ガルフォースのサイドストーリーみたいな話なんです、その中でルフィーとライアン少佐との関係が、一時期の坂井とはるなの関係に似てるような気がしました。特にあのやたらと勝負挑んでた頃の。腕も身分も戦績も凄く、さらに人望があって人気があって好かれている元エースパイロットと（ライアン少佐＝はるな ただし、はるなは現エースですが）、すべての面でそれに劣ることを思い知らされ、どうしてもそれに勝てず、自身を喪失したりヤケを起こすエース（ルフィー＝坂井 ただし、坂井はまだエースではないが）。なんか、読み終わってからそっくりそのまま坂井とはるなに置き換えてる自分に気付きましたよ。もしかして、提督この本持ってません？もし読んだことあれば、一回読んで見てください。絶対似てると思いますよ。もしかしたら、これからの坂井がルフィーみたいになるかもしれない。（神奈川県・林孝始）

么：もしかしたら、これからはるながライアン少佐みたいに……なったりすると怖いので、当分読みません。んでもって、私この本は読んだことありません。というか存在すら知らなかった。園田本は「GUN SMITH CATS」しか持ってない。ガルフォースも、表紙だけ見て古本屋で全巻まとめ買いして、以来まじめに読んだことはただの一度もないなあ。はるな＝ライアン少佐というのはまったくの偶然です。何だかやだなあ、ここんどこ自分のオリジナルにあまりに似すぎる設定が、商業ベースでやたら出て……。

## 意見。

☆「アンケート集計を次号あたり載せたいと思う」と宣言してるのに未だに集計があまり載ってない。確かそういったことが2～3回あったと思う。それと、前回の読者ページ「ストII」の意見について……

どちらかと言うと、「ストリートファイター」シリーズより「SONIC WING」の方があれこそキャラだけでもってるクソゲーだと思うのですが……。ゲームバランス悪いし、強いキャラと弱いキャラがはつきりしてるし。何よりも戦闘機が宇宙空間へ行くなんでどうも……。

念の為に、別に「ストII」は好きではないので「SW」より「ストII」の方が優れているとか、良いと言いたいわけではありません。どちらにしても最近ではおもしろいゲームがゲームセンターにないので（ストII'しかないし）家でゲームをプレイする方が多いです。ゲームセンターでは一週間に500円ぐらい（1プレイ100円）が平均です。

（千葉県・小西清彦）

么：………<sup>しまった</sup>……。でっ、でもっ、いまさら載せるのも、何だし、ね……？

ゲーセンのことは、多分世間一般が「ヒーロー」を求めているから、あんなのが流行るんじゃないかと最近思い始めてます。社会の風潮そのものがそういう傾向にあるし。自力では「でっかいこと」をやるのが難しくなっている昨今、自分に代わって「ブワツと行ける」ものに対して、一種熱狂じみた嗜好を示す、と。ゴジラ、鉄人28号、マシンロボしかり。F1しかり。ま、私は自分の限界を身に滲みて理解しているので、（負け犬根性とも言う）その辺には大して興味も持ちませんが。

ただSWについては、「ためてから大キック」だとか、「下から相手の方へ流しながら中キック」だとか、「3秒待って小パンチ」だとか、そういう細かい裏ワザじみたテクを必要としないって点だけは評価すべきだと思うな。大体私は、裏ワザを使わないとクリアするのが困難になるゲームというのは、おしなべてクソゲーだと思ってるので。そんなのはプログラマーの自己満足でしかないもんね。



無謀!?

## ストⅡ体験記!

平成4年9月3日は、私こと菊地にとって、深く禍根を残す日となるであろう。酒に酔った勢いで、自ら進んで「ストリートファイターⅡ」（スーファミ版）に手を出した日だからである。もとはと言えば、1日から3泊4日の予定で始まっていた駒大アニ研の合宿で、宿に着くなり一部の「ゲーマー」が狂ったように「ストⅡ対戦」をやりだしたことに端を発する。ヤーサンたちがマージャンを始めるのと同じ感覚である。

そして最後の晩、さすがに飽きてきた彼らは（飯の時間以外は、ほぼ9割方これに充てていたと言っていいはず）「ストⅡ最弱プレイヤー決定戦」を発案、「俺より弱い奴に会いに行く」を合い言葉に、無辜の部員たちを巻き込んでこれを決行した。アニ研では極めて影の薄い（絵がかけないから当然である）菊地は始め「カヤの外」に置かれていたが、やがて「最弱」が確定してきた頃、遂に白羽の矢が立った。「最弱プレイヤー」の名は便宜上、北見（仮名）としておこう。

時間制限はなし。完全KO制で行なわれていた。全くのトーシロである菊地は、「打撃力が強い」というウワサを鵜呑みにして本田を選択。北見氏は春麗。技を使おうとしたところでムリなのはわかっている（ゲーセン版で実証済み）ので、大パンチ・大キックのボタン位置だけ聞いてスタート。「頭突き」ができないので、とにかく間合いを詰める。そして、敵が寄ってきたところで大キック連打。……ここで、やった本人も予測しなかった事態が発生した。

「セクハラ固め」（?）が決まってしまったのである。その場にいたほとんどが唾然となるうちに春麗は40%弱のダメージを受けた。一旦北見氏は脱出に成功するが、マグレは再び発生した。もう一度「セクハラ」が決まり、あと少しで春麗ダウンというところまで行ってしまったのである。菊地は完全に空白状態になった。

「↑ボタンを押すとジャンプするよ」

北見氏の「親切的な」（その時はそう思った）アドバイスがそこで入る。ふうん、と押してみると、確かに本田の巨体が飛ぶ。そして、その時点で形勢が逆転。飛んだスキに春麗は本田を投げ、こっちが「げっ!」と慌てるうちに端まで追いつめていった。あとは北見氏の「十八番」が始まる。これは、ひたすら相手を隅に投げるといふもの。回避することは難しく、ダメージは大きい。あっという間に逆転、そのまま勝敗は決した。

第二ラウンド。

先の第一ラウンドでハメられたので（完全に自責点ではある）、警戒して飛ばずに防御に徹する。……が、今度は完全に北見氏のペースで試合が進み、流れるように決着はついてしまった。結局、私が「最弱プレイヤー」の名を頂くこととあいなったのである。

教訓。ストⅡは著しく人心を荒廃させる。自分以外を信じてはイケナヒ。

（文責 菊地）

## 郵船。

☆No.9のスタッフ紹介で希望する職業のところに日本郵船というのがありましたが、私の父親は郵船の社員です。話によると、最近是不況で苦しいそうです。父のような古参の社員には人員削減のため首を切られる人が多いそうで、父にもそんな話が来たそうです。水を差すような話ですみません。でも航海士になったら世界中をまわれますよ。ピラニアのハクセイやエジプトのみやげ物など、小さかった時には持ってきてくれましたよ。

(兵庫県・菊地研一郎)

么：……やっぱりなあ……。バブル崩壊で、ものスゲー勢いで景気が下がってるもんな。ま、見方によっては「普通のラインに戻りつつある」とも言えるけど。あの頃が異常すぎたんだよね。家では株も土地もやらないので、バブルにはまるっきり関係ありませんでしたが。……私は算数が弱いので、航海士は無理でしょう。ただ、できれば事務員ができればいいなー、と。船内売店とかね。自A隊も、PXなんかの補給業務がやりたいなー、と思ってるわけです。「てつはう」はいくら撃ったところであたるはずないし。体力ないし。

## 88。

么家の88FRがイカれました。夏場のあのメチャ暑い時期に、よく日の当たるところに常置していたのがやはりまずかったのでしょう。きれいに日本語ROMだけおかしくなつて、「スーパー大戦略」を起動するとコマンド表示が中国語みたいになります。すぐ横に置いてあるワープロの方は何ともないのに、パソコンで、本当にナイーブなんですね。

(神奈川県・菊地研一郎)

## コミケ。

☆お初にお目にかかります、北総新撰組の謎の黒幕です。'92夏コミは我が方で「空技廠」の本を委託という形で置いたのですが結果は……全滅。定期購読者がいるのである程度期待していたのですが……。今回、工事とコンサートの為、会場はせまかったし、そのわりにお客は多く、一般入場者にはきつかったでしょうが、菊地さんから購読者リスト&お客への対応法まであずかっていたのに……ひどいざんす。まあ、たしかに今回はとなりの「つくつく法師」さんと一種あやしい空間をつくっていたのは事実でちょっと近よりがたかったでしょう。(私はコンビニの制服着てました)以前、友人からRPGリプレイを委託されたときもそうだったんですが、やっぱり、ブースが合わないと売れる本も売れない」のでしょう。BlowにしろSONICKにしろPBMのブース(ゲームのブース)で売ればいい線いくんじゃないかと思えます。(ちなみに友人のリプレイ本はゲームのブースではバカ売れの完売)だから……落ちこまないで、菊地さん!

(千葉県・謎のくろまく)

么：まったく、超ドヒンシュク物でした。ご迷惑おかけいたしました。みんなも行ってくれよなー!ちゃんと公示したのに。

## 新コーナーのお知らせ

遂に、と言うかようやくやります、雑居室の改装。ちょっとテーマパーク的なものを追加。皆さんどうぞご協力を。

### ① 空技廠TRENDY-TEN!

あなたの身近で起きた、マジ／笑えるニュースを。こっちで適当に順番を振って、1位から10位まで列挙。ただしアイドルのCDが出たとか、ストIIをレベル7でノーコンティニュー・クリアしたなどの類は初めから却下するのでそのつもりで。

### ② CRUE-BASHING!

誤字・脱字を初めとする様々なミス、重箱のすみをつつくように取り上げ、筆者の不精進をあげつらうもの。個人的にはあまりやりたくないけどネ……

### ③ 三等食堂

これについては後述。

## 三等食堂おすすめメニュー コリがオイシイ!

✦ハイ、おもいつきでこんな企画を考えました。要するに「これはEイ！」と使用者に言わせる物品を誌上で紹介しようというものです。その内容はメジャーマイナーを問わず映像、音楽、ゲームソフト、書籍、食品、日用雑貨、機械、医薬品何でもアリです。読者、スタッフを問わず使用者をEイ！と思わせるものがありましたら編集部まで投稿してください。なお、このコーナーに載った物品を実際に使用してその感触を確かめた人の投稿も待っていますヨ！では今回は僕、田中真人がEと思ったものを紹介します。

商品名：機動戦士ガンダム0083（全13話） 分類：VTR、LDソフト 定価：各 ¥4800  
メーカー：バンダイ 入手方法：レコード、VTRショップ（レンタルビデオでレンタル可）

※SFアニメーションとしては超メジャー作「機動戦士ガンダム」の最新オリジナルです。僕が観た限りこの作品はガンダムシリーズ中最高傑作だと思います。

その理由はまず第1に原作者をこの作品の脚本に起用しなかったことにあると思います。ガンダムシリーズの原作者は富野氏ですがこの人の書くガンダムは「魂を地球の重力に引かれた人々云々…」と話をややこしくする傾向が大いにあります。しかし本作品はそれらをメーカーが排除させ、もっと自由に、純粋に楽しめる作品を目指したことが僕にこの作品を評価させる根拠です。言ってみれば「アニメーションらしいアニメーション」に仕上がっているとさえいいのでしょうか。主人公とヒロインの恋、リアリティあふれるモビルスーツ同志の激しい戦闘、ガンダムを操縦して主人公とライバルである旧ジオン軍のエースパイロット（笑）との激突等々。本作品は初代機動戦士ガンダムの一年戦争停戦後3年、敗けたジオン軍の残党が腐敗しきった地球連邦政府で開発された核兵器装備の新型ガンダムを強奪し、再び独立戦争を挑む、という筋書きです。

第2に映像美術の質の高さ、設定の緻密さです。近頃のOVAの質の高さは目を見張るものがありますが（中には例外もありますが）本作は特に気合いを入れて制作されていると思います。モビルスーツの戦闘シーンでは人を「オーツ」と言わせるシーンがいくつも見られますし、（事実編集長に見せたらそうなった）モビルスーツに装備される武装がまだ火薬式のマシンガンやバズーカ砲であったり細かい、時代を感じさせるコクピット（まだ全周囲モニターのリニアシートが装備されてない）実に制作に気配りが行き届いています。またオープニングでは初代作TV版のオープニングを見たことのある人なら爆笑してしまう遊び心も見られます。（知らない人にはSFアニメーションらしいオープニングに見えるでしょうが）

☂アニメーションが嫌いな人、ガンダムが嫌いな人には不向きかも知れませんが、「メカは好きだけど最近のガンダムは話がややこしいからキライ」という人にはオススメです。

☞去年からシリーズの発売が始まり、そろそろ完結しているはずですが。8月末には劇場公開もされたとか。興味のある方は1巻をレンタルされてみては？（1話の終わり方にピキッとくるものがあります）

商品名：鋼鉄の残照 分類：書籍（コミック） 作者：笠原俊夫 定価：¥880  
出版社：日本出版社 入手方法：書店

※第二次大戦末期、怒濤のごとくドイツ上空に押し寄せる連合軍の大編隊を前に世界で初めて実戦に参加したジェット戦闘機メッサーシュミット Me262がドイツ空軍として最後の大活躍をしたという史実に基づいて描かれたアクションコミックです。作品自体のカタイ設定にもかかわらず人物はやさしく、飛行機はカッコよく描かれているため、すんなり話にとけこめます。内容は初のジェット戦闘機の実験パイロットして参加した主人公が連日続く自国の

防空戦に参加したある日、同い年の上官を救ったことから、友情互いに暖め始めると同時にその上官の許婚に一目惚れしてしまい彼女もまた主人公に想いを寄せはじめる、というものです。

空戦中に撃墜した敵のパイロットの死体を見て戦うことを迷う主人公、自分の許婚と戦友との唇が重なり合うのを見てしまった主人公の上官、2人に好意を寄せ、いつ2人が空に散るかも分からない不安に襲われる少女、といった具合に人間臭さが漂い、戦いの渦の中で翻弄されながらも生きていく人間のさまを実に巧みに描いています。また人間ドラマに劣らず飛行機同志の空中戦（むしろこっちの比重が多いと言うべきでしょうね）は迫力に満ちあふれると同時に見る者を魅了する飛行機のカッコ良さがよく表現されています。登場する飛行機も知る人ぞ知る Me262を始めとして FW190、P51、スピットファイア、モスキート、ランカスター、B-24ナドナド第二次大戦の空戦の物語としてお約束をちゃんと踏襲しています。

☂ どうこう言ってもナチの第三帝国の戦いを描いたものであるものでナチと聞くのもいやだという人は読めないでしょう。（内容は思想的な話は皆無でむしろ史実と物語を組合せたものなのですが）それとバリバリのドイツ野郎か大戦中の飛行機好きでない人間ドラマを除けば「何か飛行機が空中戦してる」コミックにしか見えないでしょう。

☐ この作品はコンバットコミック誌に90年10月号～91年7月号までに連載されたコミックです。全254ページB6版で¥880はコミックとしてはやや高めですが、航空アクションコミックとしては安定した人気を持つ笠原氏の作品ですので飛行機好きにはたまらない一冊としてお薦めです。

商品名：HV-BS53 分類：機械（ビデオデッキ） 定価：¥165,000（税抜き）  
メーカー：三菱電機 入手方法：電気店など

☼ 僕の家で8年間稼働してきたビデオデッキがそろそろくたびれてきてテープを噛み切ったりするようになったので新しいデッキを導入しようと検討し、この機種に決定しました。

選定基準は(1)12~18万ぐらいの中級機であること(2)FEヘッドの装備(3)19ミクロンヘッドの採用(4)S-VHS録画可などです。

(1)と(4)の説明は省くとして(2)と(3)については簡単に説明しておきましょう。まず(2)のFEヘッドですがこれはいわゆる高級機に装備されるヘッドの一種で役割としてはダビング時などのレインボーノイズや色にじみを押さえる働きがあります。(3)の19ミクロンヘッドは3倍モードで標準モード並みの美しい画力を実現するヘッドです。これらは中級機なら大抵どこのメーカーで装備するものですが本機に選定を決定した大きな原因は三菱だけのオリジナル「テープシュミレータ」機能の装備です。

これは簡単に言うとテープの記録特性をデッキが計測してそれらに合わせて最適状態での録画を可能とさせます。なお、テープの記録特性は画面に表示させて確認するものですからどこのメーカーのテープが記録特性に優れるのかが確認できます。その他BSチューナー、ジヨグ・シャトルなど標準的な装備は揃っています。番組予約はリモコンに液晶画面が装備されていないので少々淋しいのですがデッキのウィンドウではなくTV画面に表示させるので沢山の情報を一度に分かりやすく見ることができます。（予約操作も簡単でした）

☝ 高いです。いくら電器の安い秋葉原で買ったとはいえ、税込¥102,897は簡単に出せる金額ではありません。またAV機器としてはSONY、Panasonic、Victorの御三家に比べ信頼性に一歩譲ります。使った感触としてはやはりリモコンの感度が弱い感がありました。

☐ 8月初等に購入して以来何のトラブルもなく動いていますし、8年前のモデルと比べ性能も操作性も格段にUPしていますので十分満足しています。デッキを買う時はとにかく各メーカー7~8社位のカatalogを集め、よく読んでから目的に合わせて選ぶことをお薦めします。

## 税金泥棒

前回述べたように日本の安全を保障するために存在する自衛隊はその実力を示す機会を一度も与えられないまま現在に到り、世界第3位、年間4兆円もの予算を「防衛費」として費やす武装集団となっている。しかしその存在評価はかなり厳しい。

専門家は「先進国としては最低の軍隊」と評価し、国内では「違憲」「3K(4K, 5K?)」「お役所仕事」「日陰者」「体育会系のノリ」「ミリタリーおたく」等々などいくらでもある。

自衛官の肩書きは「防衛庁職員」であるが立派な国家公務員である。国家公務員であるにもかかわらず、ずいぶん酷な評価だがここほど楽に国家公務員になれる場所もない。(何しろ前科何犯であろうと受刑中でないなら入隊できるのだから) 自衛隊が軍事的にも社会的にも評価されない原因とは何なのであろうか？

## 4兆円の行方

世界で第3位、年間4兆円(国民1人あたり¥33,000以上を支払う計算になる)という巨費を投じる割に自衛隊は軍事的な観点から見て評価を厳しくせざるを得ない。故にこれは「最低の質」と「税金の無駄使い」という評価を両立させたことになる。

ではなぜ世界一の経済力を誇るまでになったハイテクで知られる日本がこんな馬鹿馬鹿しい評価を受けるようになったのであろうか？今回はその「巨費」について考えてみよう。

「巨費」の原因は前回も述べたように

- ①狭くて小さな兵器市場(輸出の禁止)
  - ②人件費、設備費の高騰
  - ③超高価兵器の小量タレ流し生産
  - ④時代錯誤の防衛戦略
  - ⑤無能なシビリアンコントロール
- などが挙げられる。

### ①狭くて小さな兵器市場(輸出の禁止)

日本は法律で兵器やその部品の輸出がかたく禁止されている。去年(だったか?)日本航空電子工業がイランへ赤外線誘導型対空ミサイル「サイドワインダー」の部品を修理、不法輸出

していたことが明るみに出て大騒ぎになった。(何しろ当時近日中にある国際会議で日本が兵器の国際売買の中止を提案しようとしていた)日本の兵器は極力輸入を避け、国産するのは前回述べた通りである。もう一度兵器国産の理由を列挙してみると

- A.兵器を輸入に頼ると有事に補給路を遮断され、不利になる恐れがある。
  - B.外国との兵器の取引が平時に政治上の取引の条件にされる恐れがある。
  - C.輸入やライセンス生産に頼ると兵器の機密事項の習得が困難になる。
  - D.兵器の自主開発と生産が国内の技術水準の向上に寄与できる。
  - E.兵器の自主開発、生産、配備、運用と一貫した動きこそが明確な防衛力として評価できる。
- 等が挙げられる。

この結果「他人には売らないが自分の鉄砲は自分で調達する」という構図が得られる。実はこれこそが世界水準の何倍もの価格であるにもかかわらず信頼性の低い国産兵器を生み出す元凶なのである。

日本の兵器は輸出が許されていない。政府もある特定の会社(三菱重工とか石川島播磨、富士重工、小松製作所なんかが頭に浮かぶ)にしか開発や生産を命じない。その上飛行機はお前、ヘリはお前、戦車はお前が作れと政府が決めているため、国内には兵器の自由市場そのものが存在しない。

その結果会社は競争相手がいないのだから欠陥品を開発して手抜きを製造しても理不尽な値をつけなければ政府は買い取ってくれる。また欠陥があつて文句を言われても修理、改善でまた儲かる。これがアメリカのようにちゃんとした自由市場が存在するなら、「今回空自は新しい戦闘機を調達したい。各社は性能が××、値段が△△の試作機を納期□カ月以内で制作せよ」と政府が提示すれば競争会社は互いにしのぎを削りあい、競争の結果政府の気に入ったものが生産される———ということになる。

この兵器における自由市場の利点は、他品目の商品と同じように兵器が「性能の良いものをより安く、より大量に」供給される点である。しかしこれは兵器生産のためだけの理想であり、現状は法が自衛隊の装

備の高騰に拍車をかけてしまっている。この点では自衛隊の性質上、法を改正しない限り改善の見込みは皆無といえるだろう。

### ②人件費、設備費の高騰

日本の経済力は世界一と誰もが認めるが、物価でも日本は世界一高い。その水準は手元の資料によると、ニューヨーク、パリを100とすると東京は200と計算されるという。これに対し、西欧主要都市であるパリ、ハンブルク、フランクフルト、ミラノなどはせいぜい70~90にとどまる。兵器も商品の一種であるから物価の影響によって生産額が変化（しかし過去の例から見て価格が下がった例はない）することは避けられない。特に年々進むインフレが兵器の生産価格上昇に拍車をかける。

しかし日本のインフレはそれほど早く進行している訳ではないのになぜインフレが兵器生産価格の高騰に響くのか？それはそれぞれの単価が大きいこともあるが、政府の兵器行政のあり方に問題がある。



運用上でもずっと効果的だ」と主張した。

企業の言い分は筋が通っている。航空隊が同一使用目的で新旧別機種を装備すると訓練はもちろん補給、整備など運用が複雑化する。米軍や露軍の様な何千機と航空機を揃えるような軍隊なら新旧それぞれの性質を生かして多様性をもたせる、ということは考えられるが、自衛隊はそもそも少数なのでこのような兵器の調達の仕事は「非効率」という他ない。「お役所仕事」の具体例である。

結果として十年間のインフレのツケはF-4の生産費に重くのしかかり、72年に1機当たり25億円だったものが81年の生産終了間際には40億円にまで跳ね上がってしまった。

### ④時代錯誤の防衛戦略

市民社会を維持するうえで国家が必要とする力が2つある。1つは法律を破って他の市民の権利を侵害したり損害を与えた者が出現した場合に、その者を捕らえ、拘束し、取り調べるいわば社会の秩序を守る力。これは警察にあたるものである。もうひとつは国家が外部の勢力から自己を防衛するための力。組織的な暴力のプロには警察程度の力では対抗できないからこちらも平時からプロを養成しておく。そうしておけば滅多に侵略を受けない。これが軍隊である。日本では自衛隊がこれに相当する。

何のかんの理屈を付けても結成された理由は軍隊と自衛隊は変わりはない。しかし憲法の9条には明らかに矛盾した組織であるのもまた事実である。ではなぜ憲法で禁止された「陸海空の戦力」を自衛隊が保

### ③超高価兵器の小量タレ流し生産

現在、防衛費は戦前と違って特別に組まれた予算ではなく、一般の予算と同じく単年度ごとの予算編成に従っている。防衛庁は5年ごとに兵器や装備の調達量を提示するがあくまでこれは「見込み」であり、「決定」ではない。「決定」は大蔵省が査定し、国会の予算審議の結果議決されたものだけが初めて調達決定となるのである。よって兵器メーカーは予算で決められた数しか製品の納入ができない。しかし防衛庁は兵器の数をある程度揃えないとそれらを効果的に運用できないと主張するので予算が認められれば生産が続く。結果として製品は短期集中納入でなく長期小量納入となる。

商品が短期大量生産されれば安くその生産コストを押さえることができるのは周知のことだがここで「お役所仕事」が具体化してしまっている。結果としてこの小量長期納入型の兵器は恐ろしく高く値段に跳ね返る。

航空自衛隊のF-4戦闘機でこのことを見てみよう。F-4は米国製の戦闘機であるが自衛隊はこれをおよそ140機調達したいとしてライセンス生産することを企業と契約した。完成品の輸入なら1機当たりの値段が最新型でも17.8億円なのだが、72年の生産開始当初25億円が見込まれていた。しかし予算の関係で生産は遅々として進まずなんと140機を約十年（月産一機強）に渡って生産し続けた。企業は「一年間で140機を生産すれば生産コストは安く済むし、管理、

持するののか。それは自衛隊は日本が自発的に組織したものではないからである。

かつてアメリカは総力を尽くして第二次大戦に勝利した。その結果ヨーロッパではドイツが東西に分断され、以後数十年に渡ってNATOとワルシャワ両軍が睨み合いを続ける。それは資本主義社会と共産主義社会の対立という構図である。そしてそれぞれの盟主というべき存在がアメリカとソビエトであった。両者はヨーロッパで実際に戦火を交えることのない戦い、いわゆる冷戦を始める。両勢力とも盟主を筆頭として同盟を軍事的にも経済的にも強化していったが同じ頃のアジア極東では植民地支配の影響もあって事態が非常に流動的かつ不安定であった。米ソはヨーロッパほど勢力図の整理がされてなかったアジアでより激しい勢力争いを始める。そしてその勢力争いは第二次大戦終了からわずか5年後に朝鮮戦争として実体化してしまう。

太平洋戦争に敗れた日本は大国アメリカに進駐軍の駐留という形で国土防衛を負担してもらい、ソビエトから身を守ったが朝鮮戦争で米軍は日本の防衛にある程度にしか戦力が割けなくなってしまう。そこで連合軍最高司令部は日本に再軍備を要請した。日本としては米軍の占領下であったから日本国憲法の第9条があろうとも拒むことはできなかった。

再軍備するとなれば今度は攻められても敗けないよう、過去の戦訓を生かして部隊を編成するのは当然である。戦中日本軍が取った国土の防衛戦略は海岸沿いに部隊を配置して敵の上陸があれば早期にこれを集中的に攻撃して撃破しようといういわゆる水際作戦であった。これは平たく言えば軍の少数精鋭編成である。しかし誰もが知っているように戦中日本全土は米軍の戦略爆撃機によって連日じゅうたん爆撃を受け、各部隊は大きな損害を被った。そこで戦後はいわゆる内陸持久型の防衛構想（質より量）が考えられたが色々な政治的理由から現在の自衛隊は半世紀前と同じ防衛構想に基づいて編成されている。

これを現在の軍隊に当てはめると少数精鋭には「高性能電子機器に制御され、扱いが簡単で高い命中精度、強力な攻撃力」を持つ兵器が必要となる。解答はおのずとハイテク兵器と導かれる。これも自衛隊の兵器高額化に一役買っている。防衛庁に言わせるとこのような兵器の利点は部隊を増やさなくても高い防衛阻止力を築くだけでなく、部隊の訓練、演習を少なくしても成果が十分期待できる、というものである。

しかしこの少数精鋭の防衛思想は諸刃の剣で

である。まず各個の機能が高くとも部隊の数が少ない以上有効な指揮がないと効果的な運用がまず期待できない。さらに兵器の電子自動化は常に整備を必要とし、修理は長期難化させ、交換部品が途切れると全く機能しない鉄クズと化す。またそもそも電子機器は耐久性に乏しく、価格が非常に高くなる。

最上の防衛戦略は陸海空それぞれにバランスが取れ、それぞれが有機的に組み合わせられて効果的に機能し、状況に応じて水際作戦であろうと内陸持久作戦であろうと柔軟に対処できることであるが現在の自衛隊はそのどれもが欠落する上に金は喰うという最悪の状態である。（軍備に見えても災害救助というのが平和的でいいのか？）

#### ⑤無能なシビリアンコントロール

アメリカ製の超音速戦闘機 F-4ファントム。マッハ2級の高速戦闘機としては世界で最も多く生産されたベストセラーのうちの1つである。その人気の秘密は戦闘機として空戦格闘性能に優れるだけでなく有り余るそのパワーから生まれた大容量兵器搭載能力で対地攻撃もOKという「1粒で2度おいしい」という点である。要するに価格は少し高いが、戦闘機としても攻撃機としても使えるため両方を揃えるよりも安い上に状況に応じて柔軟な戦術を可能にする誰もが名機と認めるジェット戦闘機である。

航空自衛隊もこの利点に着目してこの F-4の導入を70年に決定したが当時の中曽根康弘防衛庁長官は「F-4の持つ長い航続飛行距離と対地攻撃力は近隣諸国の脅威に値する」として爆撃装置と空中給油能力の取り外しを命じた。中曽根長官は「専守防衛を目的とする自衛隊に必要な以上の攻撃力は不要である」と考えたらしい。だが仮に迎撃空戦能力だけを求めるなら他にもっと安くその点だけなら優れた機体があったにもかかわらず F-4 の生産は続けられた。

そして2年後には田中内閣で「支援戦闘機」という肩書きの国産対地攻撃機 F-1の生産が決定する。しかし F-1は F-4に性能的に見て F-4に遥かに劣る機体である。生産は合計77機が十年間に渡って細々と続けられ、単価は初期の15億円から40億円へ急上昇。これなら始めより多く F-4を生産した方が効率的だったと思うがこれが「高度な政治的判断」の結果なのであるのか？

# BLOWERS読者アンケート総合結果発表

by 田中真人

★本来なら前号で発表するはずでしたが、諸多の事情により今回となってしまいました。申し訳ありません。8号の特別編集に関する意見は賛否両論でしたが予想よりも多くの解答が得られました上に8号の編集を「良」と評価する人が多く、喜んでいきます。このアンケートを地盤により面白い Blowersを目指したいと僕自身は考えています。しかし現状の Blowersは前途多難となっており、廃刊の危機にあることも事実です。詳しくは本文にて…。

**Q1 製本について** 誌のホチキスの打ち方が従来 of 腹打ちから背打ちに変更。この評価を書いて下さい。

読者意見：「これがいいんじゃないっすか。開きやすいし…」「コピーしやすい（減多に必要なこともないが）」「読みやすかった」「この方がホチキスの刃が抜けることもない」  
評価率 いし見た目にもいい」「読む時に指に引っ掛からない」「背打ちの方が美しいのは確  
91,66% かなだ」「腹打ちは開けにくい」「ノドにかかる部分も見やすくスッキリしている」

分析結果：本件に関しましてはアンケートの解答の殆どがAを選択し、上記のような意見が得られ、大変喜んでおります。ただし背打ちは腹打ちに比べきれいに仕上がる反面、労力が大きくなる、大型ステープラーを用意しないと増ページが望めないなどの欠点があります。そのため従来号では腹打ちが採用されています。改善策は設備投資ですが何しろ編集長は万年金欠病ですからね…。

**Q2 包装について** 郵送中の防水対策としてビニールで包みましたがどう思われますか？

読者意見：「万一のことを考えると袋に入れた方がいいんだけどね。お金かかるかと思って」  
「少なくとも私のところでは必要ない」「何だか高級感があつていい」「防水対策はしてほしい」  
「梅雨時なんかはいいと思う」「見たときにカッコイイ！と思ったけど  
評価率 今までに雨などの被害を受けたこともなかつたし、ないほうがコストダウン+省エネ  
66,66% で良いと思う」「すごくいいんじゃないか」「包装したほうがより良いのは確かだが  
高くないかい？（梅雨時は別）」「やっぱこういった細かなところから読者の心をつ  
かんでいかないとねえ」

分析結果：評価は「どっちでもいい」と「すごくいいから続けろ」に分かれました。しかし大多数の読者は「見栄えがいいし、続けてもらいたいが製作費がかさむのでは？」と考えておられるようです。僕自身としましてはビニールは1枚10円以下の（もちろん税込）で購入したものを使用したのですからそれほど費用はかかっていません。次回特別編集をする機会があればまたビニール包装はやろうと考えています。

**Q3 最終ページについて** 内輪ネタをカットして誌中状況報告。内輪ネタは是か否か？

読者意見：「内輪ネタを入れることによって親近感を持たせる！」「話の程度による」「内輪ネタって分からない人には分からないのでイヤ」「内輪ネタや連絡等にもっとページを使ってもいいと思う」「合理化には賛成見て楽しめる構成を」「読みやすくていいけど内輪ネタも読みたいのが本音」「訳の分かる内輪ネタなら良いのだけれど（あるかいそんなん）」

分析結果：一般的な意見としては「内輪ネタは嫌いではないけど内容の分かるネタじゃないとちょっと…」という感じでしょうか。今回こんな質問を設けたのは実は内輪ネタの内容の深さに読者がどう反応しているかを知りたかったからです。（嫌われているのに載せてもしょうがないですからね。）結果としてはやっぱり「ないと淋しいし、つまんない」といったところでしょうか？



Q4, 5 Blowers についての不満・改善要求を書いてください。

PBM: 「増ページを願う」「真鶴…X-WINGが使いたい」「最近話がNPC中心になってきてるの  
でPC中心にして欲しい」「真鶴にイラストが欲しい」「真鶴でキャラ紹介があるといいか  
な?」「参加してねーからわからん。レポートはこんなもんでいいと思う」「新入生の方  
へ”ってのはすごく親切でよかったと思う」「もう少しページを増やしていい気が…」  
「王虎  
戦史(注延期になったPBM)に期待しよう」「参加しにくい」「メカとか弱いから参加で  
きないんだけど(真鶴もよく分かんない)」

イラスト: 「もっと沢山あって良いかも。目次とか内輪ネタとか読者コーナーにカット付ける  
とか」「合間合間に少しずつでもイラストが入ると、読み疲れしないと思う」「美樹  
本晴彦を使ってみるとか」「上手過ぎる…。画力レベル2の俺から何も言うことはない  
」「増える分には問題なし」「(表紙の)MKⅡかっこいい!でも少しアクションが  
欲しかった」「マンガが載るそうなので問題なし」

小説・エッセイ: 「特に問題なし」「このコーナーを楽しみにしている読者は何人ぐらいいる  
のでしょうか?」「やっぱみんなうまいな」「あれだけ書くのは大変だろう  
なあ感心感心」「ダミアン鬼崎氏との後書きのやりとりについて、こういった  
意見の食違いは筆者と編集部との私信でのやりとりで改善させるなり意見交換  
するなりした方が無難だと思う」「いーんじゃないかな?でもこの2つはBlow-  
wersの柱だから何か考えた方が良いかも」「いろんな小説読みたいです」  
「Mental-のキャラクターのネーミングが何となく好きではない」

その他追加してほしいコーナーがあれば書いてください

「F.S.S (ファイブスター)のコーナー」「素人のための兵器解説!」「ただのりなさんの  
イラスト講座をやってみるとか…」「毎号アンケート増設してみてもは?(意味不明の三択、四  
択を除いて)」「読者の方にも参加してもらえの特集コーナーとか」

その他意見があれば書いてください

「見やすく見てくなる様な誌面作りに頑張って欲しいです。もちろん内容も」「連載に関  
して気づいたことはバシバシ言って欲しい」「W-WINGが使いたい!X-WINGが使いたい!X-WING  
が使いたい!X-WINGが…(以下略)」「現時点では特にナシ」「落ちると淋しい」

総合評価 8号の特別編集 Blowersについて評価してください(各%は得票率)

A.良いと思う 75,0% B.従来号の方が良い 0% C.どちらでも良い 16,7% D.無回答 8,3%

あとがき 編集長に無理矢理頼んでさせてもらった特別編集でしたが、思ったより高い評価を  
アンケートから得ることができて大変喜んでおります。しかし現在の Blowersは  
危機的な状況にあるのもまた事実なので手放しには喜んでいられなくなりました。そ  
れは読者の皆さんも何となく感じておられるでしょうがBlowの質の低下です。それは  
9号の誌面でその傾向が明らかとなっています。表紙・目次込みで24ページ中10ペー  
ジまでが読者のお便りや内輪ネタで占められています。これは意識してのことではなく  
慢性的なライター&イラストレーター不足によるものなのです。この状態が続くと編  
集者は本の維持のために読者からのお便りや内輪ネタで潰すしかありません。すると  
内容はどんどん深くなり、新しい読者は内容が理解できないため、講読をやめてしま  
います。まさにBlowはこの悪循環の真っ只中にあります。僕はその状態を好ましく思  
わなかったため8号で内輪ネタをカットしたのです。問題はこれから新しいスタッフ  
をどう集めるかなのですが…。

プレゼントのワッペン三重県の勝本充司さんにお送りしますご協力ありがとうございました

## 航海日誌

菊：8月末に14万もらったはずなのに、今は手持ちがナイ。…模型が怖い…

宇：↑の貧乏人は、たまたま大金を手にしたもので、アツという間に散財してしまいましたとき。いと哀れ。

岬：待ってる間は「もう来るか」と思いつつ、また行ってしまうコミケの不思議さ。うん。

長：…で、展開が…

井：機関車はすんごく、つらいです。

た：もう寒いよ、こっちは…今日もGジャン着て出かけてしまった。これからどんどん寒くなるのね。ううっ

孝：いよいよ残業が付き始めました。仕事も少しずつ忙しくなってきましたが、めげずに頑張っていきたいものです。

紺：「タンクトップ」という名の服をレオパルトIIやM1A2のことかと勘違いした。嗚呼。

田：今号が遅れたのは全部僕のせいです。すいません。おおおシャカ様がキイキイ。

### Crew

編集長：菊地研一郎 / 編集補佐：宇垣麻美

筆者：Damyant-Kizaki 本居こじ 見孝秀一

岬当麻 紺野紫楼 田中真人 / 絵：ゆきま

井村和正 ただのりな Damyant-Kizaki

孝行始 (脱稿順)

Blowers 第11号

第3巻第7号 (通巻12号)

平成4年9月30日発行 代価300円

(送料別)

編集人 菊地研一郎

発行人 菊地研一郎

発行所・印刷所 「空技廠」



※本誌記事の一部または全ての無断使用を禁じます。

今月の表紙

「昔日」

絵：井村和正

次号は 11月下旬 発行予定です。

なお、原稿メ切は11/20 (必着) です。

